

着て、布の耳を締めた十二ばかりの女の子が提灯をさけて、園のところに現はれた。

「旦那に灯をお見せ。」と山番は娘にいひつけ、私には「馬車は櫓の下へ入れて置きます、といふ。」

女の子は私をちらと見て、奥に入る。私は後からついて行つた。

山番の小舎は煤けて、低く、がらんとして、天井床もなく、仕切りもない、たつた一つの部屋があるばかりであつた。壁にはほろほろの毛皮外套がかかつてゐる。腰掛には單發銃が置いてあつて、片隅には檻糞が山のやうに積まれ、煖爐のわきには大きな壺が二つ置いてある。テーブルの上には木片が燃えて、物悲しさうに燃えあがつたり消えたりしてゐる。小舎の真ん中には、長い竿の先に括りつけた揺籃が下がつてゐた。女の子は提灯の火を消して、小さな腰掛に腰をかけ、右の手で揺籃をゆすぶり、左の手で木片を直しはじめた。あたりを見まはすと、——私の胸は疼き出した。夜分、百姓家へ入つて来るのは氣持のよいものではない、揺籃の中の赤ん坊は苦しさに、せかせかと呼吸をしてゐる。

「お前、ここに一人つきりかい？」と私は女の子に訊ねる。

「はい。」と、やつと聞こえるやうな聲でいふ。

「お前、山番の娘かい？」

「はい。」と囁く。

戸が軋めいて、山番が頭をかがめながら、園を跨いで入つて来た。提灯を床から取り上げて、テーブルのところに行き、蠟燭に火をつけた。

「何でせうな、木片のあたりなんかお珍しいでせうな？」といつて、縮れた毛をゆるがす。

私は彼を眺める。こんな立派な男を見たことは、めつたになかつた。背が高く、肩幅が広くて、見るからに均齊がとれてゐる。濡れた、手織りの襯衣のかけから逞ましい筋肉がむくむくと盛りあがつてゐる。黒い縮れた髪は、厳めしく、男らしい顔の半ばを蔽ひ、兩方が繋がつてゐる。太い眉毛のかけからは、さして大きくない蔦色の眼が憚るところなく覗いてゐる。彼は手をかく腰にあてて、私の前に立ち止まつた。

私はお禮をいつて、名前を訊いた。

「名はフーマーですけれど、」と彼は答へた、「綽名を<sup>\*\*\*</sup>狼と申します。」

「え、お前が狼だつて？」

\* 木片 木片を燃やしてランプの代用にする。

\*\* 狼(ピリユーク) 「オリオール縣では寄邊なく暮らして、氣むづかしい人をかう呼んでゐる。」(作者註)

私は一そう強い好奇心をもつて彼を眺めた。うちのエルモライやその他の人たちから、この邊の百姓の誰も彼もが火のやうに怖れてゐる山番のピリュークの話は度々聞いてゐた。彼等にいはせると、世界廣しといへども、自分の仕事をあれほど巧くやつてのける者は未だ曾てなかつたとのことである。

「あいつは枯枝の一把も持つて行かせねえ。そんなことでもしたら、いつ何時でも、たとひ眞夜中だらうが、雪なだれのやうに、いきなり押つかぶさつて来るんだ。あいつに手向ふなんて考へたつて駄目だ、——何ていつたつて悪魔みてえに馬鹿力はあるし、すばしこいんだから……。どんなにしたつて、こつちの者にや出来ねえ。酒を飲ましたつて、錢をつかましたつて、どんな廻まわりかけたつて駄目だ。これまでも上手な連中が彼奴を娑婆から追ひ出さうと目めろんだことが一度や二度ぢやなかつたが、駄目の皮だ、うまく行きやしねえ。」

近所近邊の百姓たちは、ピリュークのことをかういつて噂してゐたのである。

「それぢや、お前が狼ピリュークなんだね、」と私は繰り返した、「お前のことは噂に聞いたことがあるよ。お前は誰にも容赦がないさうだな。」

「眞直ぐに、するだけのことをするまでさ。」と彼は無愛想に答へた、「何もしないで、御主人様に食べさしていただく譯には行きやんせんもの。」

彼は腰に挟んだ斧を取つて、床に腰をおろし、木片を割り始めた。

「時に、お前、女儀かみさんはないのかね？」と私は訊いてみた。

「はい。」と答へて、力いつぱい斧を振る。

「亡くなつたんだね、して見ると？」

「いんえ……はい、亡くなつたんです。」と附け加へて、わきを向いてしまつた。

私はそれきり黙つてゐた。彼は眼をあけて、私を見た。

「實は田舎廻りの商人と駈落ちしましてね、」と彼は痛々しげな微笑をうかべていつた。女の子は顔を伏せた。赤ん坊が眼を覺まして泣き出したので、女の子は搖籃のそばへ行つた。

「そら、これをやれ、」とピリュークは汚いおねぶりを娘の手へそつと渡しながらいふ、「まあ、こいつまで見棄てて行つちまつたんで、」と赤ん坊の方を指しながら聲低くいひつづける。

彼は戸口へ近づいて、立ち止まり、こちらを振り向いた。

「きつと、旦那様なんかは、」と彼はいひ出した、「わつし共の麵麩めんこなんかはお上りおがにならんでせうが、さうかといつて、ここには麵麩のほかに……」

「お腹なかは空すいてゐないよ。」

「それぢや、どうか御隨意ごずいに。サモワールくらゐ支度してもよろしうございますが、生憎お茶

がありませんで、……まあ、ちよつと行つて、お馬を見て参りませう。」

彼は表へ出て、戸をびたりと閉めた、私はもう一度あたりを見廻した。小舎は前よりも一そり物悲しく思はれた。冷たい煙のはげしい匂ひが不快に私の息をつまらせる。女の子はその場を少しも動かさず、眼をあげなかつた。時をり播籃を押ししたり、さがつて来る襦衣をおつおつと肩に引き上げたりしてゐた。露はな足は微かに動くこともなく垂れてゐた。

「お前の名は何ていふの、」と私は訊ねた。

「ウリータ、」物悲しさうな顔を更に俯向けて女の子はいふ。

山番が入つて来て、腰掛に腰をおろす。

「雷もやみました、」と暫く黙つてゐた後でいふ、「何なら、森の出口までお伴しませう。」

私は立ちあがつた。ピリュークは鐵砲を出して、藥池をあらためる。

「そんなものをどうするんだ？」と私は訊ねた。

「森中にいたづらをする奴があるやんしてね、……『馬ヶ谷』んところの樹を伐るもんですから。」と私の不審さうな眼つきに答へて附け足した。

「へえ、それがここから聞こえるのかね？」

「おもてへ出れば聞こえます。」

私たちは連れ立つて外へ出た。雨はやんでゐた。遠くの方にはまだ雨雲の團々が重く群がつてゐて、時をり長く稲光りが光つてゐた。けれども、空を見上げると、ここかしこに紺碧の空が見えて、疎らに、箭のやうに飛んで行く雲のかけには、星がちらちらと覗いてゐる。雨に濡れ、風に揺れる樹々の形は闇の中からくつきりと現はれはじめる。私たちは耳を澄ます。山番は帽子を脱いで、うつ向いた。

「あ……あれです、」と彼はだしぬけに言つて、手をさし伸べた、「御覽なさい、こんな晩を選つて来たんです。」

私には樹の葉のざわめきのほかには何も聞こえなかつた。ピリュークは檐の下から馬を連れ出した。

「だが、こんなことをしてゐると、ひよつとして、」と大きな聲で附け足した、「取り逃がすかも知れん。」

「私も一緒に行かう、……構はなかつたら？」

「どうぞ、」かう答へて、馬をまた曳き入れる、「今ぢきに捉まへて、それからお見送りませう。さあ、参りませう。」

私たちは出かける、ピリュークが先に立つて、私がそれに躓いて。彼がどうして道を見分ける

のか、それはまるで分からなかつた。彼はほんの一二度、立ち止まつたが、それは斧の音に耳を傾けるためであつた。

「ほら、」と彼は齒を喰ひしばつたまま呟いた、「聞こえませう？ 聞こえるでせう？」

「一體どこに？」

ピリニークは肩を竦めた。私たちは谿へ下りて行つた。一しきり風が静まる。調子をとつて打ちおろす斧の音が、はつきりと私の耳にも聞こえて来た。ピリニークは私をちらと見て、頭を振つた。私たちは濡れた羊齒や蕁麻を押し分けて、すすすす進んで行つた。低い、籠つたやうな唸りが聞こえて来た……。

「轉がしやがつたな……」とピリニークが呟いた。

その間に、空はだんだんと曇れて来て、森の中も仄明るくなつて来た。やつとのことで私たちは谿間を出た。

「ここで一寸お待ちなすつて、」と私に舌うちして、山番は身をかがめ、鐵砲を上にしあげながら、叢林の中へ消えて行つた。私は息を殺して耳を敬てた。絶え間ない風のざわめきに交つて、間近いところから微かな物音が聞こえるやうな氣がした。あたりに氣をつけて枝を拂ふ斧の音や、車輛のきしめき、馬の鼻息など……。

「どこへ行く？ 止まれっ！」

ピリニークの破れ鐘のやうな聲が俄かに響き渡る。もう一人の聲は、畏にかかつた鬼のやうに、おどおどと憐れな叫び聲であつた……。組打ちが始まつた。

「ふざあけやがる、ふざあけやがつて！」とピリニークは息をはずませながら繰り返した、「逃がすもんか……。」

私はどよめく方を目ざして飛んで行き、一足ごとに躓きながら摺合ひの現場へ駆けつけた。地べたの、伐り倒された樹のそばに、山番は蠢いてゐた。彼は泥坊を組み敷きながら、帯で後ろ手に縛り上げてゐたのである。私はそばへ寄つて行つた。ピリニークは起きあがつて泥坊を引き立てた。見ると、襤褸を身につけ、長い髻をかき亂し、濡れ鼠になつてゐる百姓であつた。そこには、ごつごつした蓆を半分かぶつたやくざ馬が荷馬車の空の車臺をつけられて立つてゐた。山番は一言も物をいはない。百姓もまた黙り込んで、頭をふらふらさせてゐるばかりである。

「放してやれ、」私はピリニークの耳に囁いた、「樹の代は私が拂ふから。」

ピリニークは黙々として、左手で馬の額毛を引つつかみ、右手で泥坊の腰帶をつかまへた。

「さあ、急げ、この狐鼠盗奴！」と彼は荒々しくいつた。

「そこにある小斧を取つて下せえ。」と百姓は謔言のやうに呟いた。

「これを失くして堪まるかい！」といつて山番は斧を拾ひ上げた。

みな歩き出した。私はうしろから跟いて行く……。雨はまたほつほつ降り出して、忽ち土砂降りになった。やつとのことで私たちは小舎に辿り着いた。ピリュークは捕へて来た馬を庭の眞ん中にうつちやらかして、百姓を部屋に連れ込み、帯の結び目をゆるめて、片隅に坐らせた。煖爐のそばに深い眠りに落ちかかつてゐた女の子がむつくり起きあがつて、口もきかず怖ろしさうに私たちを眺め始めた。私は腰掛に腰をおろす。

「や、ひでえ降雨だ、」と山番がいふ、「やむまではどうしてもお待ちなすつて。横にでもおんなすつては？」

「ありがたう。」

「旦那様のお邪魔になりやんすから、こいつを物置へでもぶち込んで置きたいんだけど、」と百姓を指しながら言葉をついだ、「でもその門かどが……」

「そこへ置いてやれよ、そつとして置けよ。」と私はピリュークを遮つた。

百姓は上眼づかひに、そつと私の方を見た。私は心の中で、どんなことがあつてもこの哀れな男を放してやらうと誓つたのである。百姓は身動きもせず腰掛に腰をかけてゐた。提灯のあかりによつて、頬のこけた皺だらけの顔、垂れさがつた黄色な眉、きよときよと落ち着かない眼、

瘦せ切つた手足などを私は見分けることが出来た……。女の子は百姓のすぐ足もとの床の上に横になつて、また寝入つてしまつた。ピリュークは両手で頭を抱へながら、テーブルに向つてゐた。蟋蟀が隅の方で鳴いてゐた、……。雨は屋根をたたいて、窓づてに滑り落ちる。私たちはみんな黙つてゐた。

「ファマー・クヂミツチ」不意に百姓が縫れた微かな聲で言ひ出した、「ファマー・クヂミツチ。」

「何だ？」

「勘忍してくろよ。」

ピリュークは返事もしない。

「勘忍してくろよ……、食ふに困つて、やつたことなんだ……、勘忍してくろよ。」

「貴様らがことは分つてるんだ、」山番は無愛想にやつつけた、「貴様らが村はみんなさうなんだ……、どいつもこいつも泥坊だ。」

「勘忍してくれろ、」と百姓は繰り返すばかりである、「お邸の執事さまがひどいんで……、俺らは落ちぶれさせられて、ほんとに……勘忍してくれろ！」

「落ちぶれたつて……いくら落ちぶれたからつて、盗むつちふ法はねえんだ。」

「勘忍してくれろ、フーマー・クヂミッチ、……あんまりな目に遭はせねえでくろよ。あの執事には知つての通り、咬み殺されるだらうからな、きつと。」

ピリニークはわきを向いた。百姓は熱病にでもとりつかれたかのやうに、ぶるぶる顫へてる。頭をかくかく動かして、ときれときれに呼吸をしてゐる。

「勘忍してくれろ、」と百姓は失望落膽して繰り返した。「勘忍してくれろよ、後生だから勘忍して！ 金は拂ふから、それあ、きつと拂ふから。全くのところ、食ふに困つてしたことだ、……、餓鬼どもが泣くんで、お前も覚えがあるだらうが。全く、どうにもせつばつまつて。」

「だと言つて、とにかく、盗むつちふ法はねえんだ。」

「でもあの馬を、」と百姓は言ひつづけた。「あの小馬を、せめてあれだけなりと……、あれは、後にも先にもたつた一つしかねえ生物なんだから……放してやつてくれろ！」

「駄目だといふのに。俺だつて自由の身ぢやなし、役目があるんだ。そんなことをしたら、こつちが罪を着るだけだ。それに、貴様らの言ひなりにしちや置けねえんだ。」

「勘忍してくろよ！ 困つたからしたことだ、フーマー・クヂミッチ、困つたからなんだ、ほんとに、何も別に譯はねえんだから……、勘忍してやつてくろよ！」

「分つてるんだ！」

「なあ、勘忍してくろよ！」

「ええ、貴様なんぞと兎や角いつたつて仕様がねえ、おとなしく坐つてろ、言ふこと聞かなくや、いいか？ ここに旦那のいらつしやるのが見えねえのか、あ？」

哀れな男はうなだれてしまった……。ピリニークはあくびをして、テーブルの上に頭をもたせかけた。雨はまだ止みさうもない。私はどうなることかと待つてゐる。

百姓はいきなり反り身になつた。彼の眼は輝き、顔は朱を注いだやうに眞赤になつた。

「やい、さあ来い、斬るなり焼くなりしてしろ、さあ、」と眼を釣り上げ、口もとを歪めて言ひ出した。「さあ、この罰あたりの人殺し、基督信者の生血が飲めたら、飲んでみる……」

山番はくるりと向き直る。

「貴様に言つて聞かしてるんだ、貴様に。この外道奴、人非人！」

「酔つばらつてんのか、あ、何を悪態つくつもりなんだ！」山番は呆れてかう言ひ出した、

「氣でも違つたのか、あ？」

「酔つばらつたつて！ ……酔はうと酔ふまいと、貴様の世話になつたか、この罰當りの人非人、畜生、畜生、畜生！」

「ええ、この野郎……ようし、貴様を一つ……」

「俺をどうするつて？ どつちみち同じことだ、どうせ駄目なんだ。馬を取られて、どうなるもんか！ 叩き殺せ、いつそ一思ひに殺せ。餓死しようとか、ここで殺されようと、結局おんなじことだ。みんな死んじまへ、女房も餓鬼も、——みんなくたばれ……。だが、貴様は待つてろ、それだけのことはしてやる。」

ピリニークは立ちあがつた。

「叩け、叩き殺せ、」と百姓は殺氣だつた聲で詰め寄つた、「殺せ、さあ、さ、殺せ、」(女の子はあわてて跳び起きて、百姓に眼を注いだ。)  
「殺せ！ 殺せ！」

「黙れ！」と山番は唳鳴つて、二歩ばかり踏み出した。

「澤山だ、澤山だよ、フアマ、」と私は叫んだ、「放つとけよ……構ふなよ。」

「黙んねえぞ、」と不幸な男はいひつづけた「おんなじことだ、——どうせ、一度はくたばるんだ、この人非人、畜生、貴様も打つ潰されねえでおくものか、……まあ待つてろ、勿體ぶるのも永くはねえぞ、 追つつけ貴様の首も締められるんだ、待つてろ！」

ピリニークは百姓の肩をつかんだ。私は駈け寄つて、百姓を助けようとした……。

「旦那、構はねえで下せえ！」と山番は私を唳鳴りつけた。

私はこの脅やかしをも怖れず、すでに手をさしのべてゐた。ところが實に驚いたことには、山

番はぐいと引つぱつて百姓の臂を括つた帯をほどき、襟元をつかまへて帽子を目深にかぶせ、戸を開けて表へ突き出した。

「馬をつれて、さつさどどこへなと行きやがれ！」と彼は百姓の後ろから呼びかけた、「だが、氣をつけろよ、今度おれん所へ來たら……」

彼は小舎へ引き返して來て、隅の方で何かを掻き始めた。

「や、ピリニーク、」と漸く私は口を切つた、「たまけたぞ。今の様子を見ると、お前はなかなか素晴らしい奴だなあ。」

「いや、もう結構です。旦那、」と彼は忌々しさうに、私の言葉を遮つた、「それだけは仰つしやらないで、それよりももう、そろそろお見送りをいたしませう、」といつて、なほ附け足した、「これくらゐの小降りならお待ちになるがものはないでせうから……」

表では百姓の馬車の車輪が軋り出した。

「ふむ歩き出した！」と彼は呟くやうにいつた、「しかし、俺はあいつを……」  
半時間ほどして、彼は森の出口で私に別れを告げた。

## ビエージンの草原

幾日も天気をつづいた時でなければ見られないやうな、七月のよく晴れた日であつた。朝早くから空は澄みきつてゐる。有明の光も火のやうに燃え立つのではなく、柔かな紅らみをみなぎらせてゐる。太陽も焦きつけるばかりの旱天の頃のやうに、火と燃えて暑苦しくはなく、また嵐の前によく見るやうな陰つた茜の色もなく、明るく、なつかしい輝きを放つて、細長い雲のかけからいそいそと浮きあがつて来て、爽かにかがやき、やがてまた薄むらさきの霧に没してしまふ。立ちのほる雲の細かな上縁は小さな蛇のやうに閃き初める、その閃光は煉られた銀の閃光のやうだ……。するとまた揺らめく光線が迸る、——愉しげに、おごそかに、舞ひあがるかのやうに、大どかな太陽が昇つて来る。正午ごろになると、いつもやはらかな白い縁をつけて黄金色を帯びた灰色の圓い高い雲がいくつとはなしにあらはれる。かぎりなく溢れる川のおもてに、青く深く透きとほる流れにかこまれ、撒き散らされてゐる鳥々のやうに、雲は殆んど動かない。ただはるかに遠く、地平線に近いあたり雲は動き、雲は互ひに寄りそつて、その間にはもう青空は見

えぬが、しかも雲そのものは空と同じやうに瑠璃色に、光と熱とを一ぱいにふくんでゐる。地平線の色のほのかに、薄むらさきの色もあせて、そのまま日の暮れるまで變りなく、見わたすかぎり一様だ。陰るところはいづこにもなく、夕立雲の叢るところもなく、ただどこかしらに、青味を帯びた細い筋が低く垂れる、——かと思へば、それは見えるか見えないほどのこまかな雨が降き散らされてゐるのであつた。夕方ちかくなると雲は消える。ただ最後の駒すんだ煙のやうに覺束ないのが、入日の前に薔薇いろの球のやうに浮かんではゐる。昇る時のやうに靜かに陽の沈んだところには、緋の色の夕映えが、しばしの間、昏くなつてゆく地の上に漂ひ、空には、心して徐かに運ぶ蠟燭の火のやうに、靜かに瞬きながら夕べの星が點される。かやうな日にはすべての色が柔かく明るいけれども冴えてはゐない。あらゆるものが身に沁みるやうな或る温か味を帯びてゐる。こんな日には、ともすれば暑さ厳しく、野原の斜面が『いきれる』ことさへもある。けれど風が鬱積した暑さを吹き拂つて、埃りの渦巻が、——天気つづきの確かな印の——道に沿ひ、田圃を越えて、高く白く捲きあがり、いづこともなしに行き過ぎる。乾き切つて澄んだ空氣に、苦蓬や、刈りとられた裸麥や、蕎麥の香ひがする。もう一時間で夜になるといふ頃になつても、少しの濕り氣も感じられぬ。麥を刈るのに百姓たちが望むのは、かやうな日和である。

私は丁度こんな日に、トッラ縣のチェールン郡へ松鷄を射ちに行つたことがある。私は實に



たくさんの獲物を見つけて射おとした。いつばいになつた獵獲は容赦もなく肩を傷めつけた。私がいよいよ家へ歸らうと思つた頃にはもう夕焼の色もあせて、落日の光はうけぬながら、いまだに明るい空には、冷え冷えとして影が次第に濃くなり擴がり出してゐた。私は足早に、長々とつづく灌木の『廣つば』を通り過ぎて、とある丘に登つて行つた。すると右手に榎の木立があつて、遠くに低い白壁づくりの教會堂のある、いつも見慣れた平地が見えることと思つてゐたのに、意外にもまるで變つた、見知らぬところがあらはれた。足もとには狭い谷がつづいてゐて、眞向ふには峻しい牆壁のやうに、笹柳の密林が聳えてゐる。私は腑に落ちないままに立ちどまつて、あたりを見まはした……。『ええ！とんでもないところへ來てしまつたぞ。右へ右へと寄り過ぎたのだ。』と考へ、我ながらどうしてこんな間違ひをしたのかと呆れながら、大急ぎで丘を下りて行つた。すると忽ちにして、さゆらぎだもしない、不愉快な濕り氣にとりかこまれて、まるで穴倉の中へでも入つたやうだ。谷底に高く茂つた草はすつかり濡れて、平らな卓子掛のやうに白い。その上を歩くのは何とはなしに氣味が悪い。急いで向ふ岸へ這ひ上つて、笹柳に沿つて、道を左手にとつて歩いて行つた。蝙蝠はもう、あやしげに輪を描いて、薄暗いうちにも澄んでゐる空に顫へながら、眠りかけてゐる梢のうへを飛びめぐつてゐる。歸りおくれた若鷹は、峙をさして急ぎながら、いきほひよく、空の高みを眞直ぐに飛んで行つた。『よし、あの端れまで出た

ら、きつと道もあるだらう。』と私は心の中で考へた、『それにしたつて、一露里ほども廻り道をしてしまつた！』

たうとう森の端れまで辿りついたが、道らしいものは一向にない。何かの、刈り残しておいたやうな低い灌木が、眼の前に廣々とつづいてゐる。そのさきの遙か遠くの方には茫々たる野原が見える。私はまた立ちどまつた。『何ていふことだらう？……ここは一體どこなんだらう？』晝のうち、どこをどうして歩いてゐたのか、私は記憶を辿り出した！『やつ！ここはバレーヒンの藪だな！』私はつひにかう叫んだ、『てつきりさうだ！あそこに見えてゐるのがシンチェーフの森に相違ない、……だが然し、どうしてこんなところへ來てしまつたのだらう？こんな遠く？……をかしい！さあ、もう一度、右へとつて行かなくちやならん。』

私は灌木の茂みを越えて、右の方へと進んで行つた。そのうちに夜が雷雲のやうに迫つて來て、次第に濃くひろがつて行つた。闇は夕じめりと共に、あちこちから立ちのほつて、また、高いところから流れ落ちて來るやうにさへも思はれる。さうかうしてゐるうちに、踏み均らされてゐない草茫々の小徑に出た。私は氣をつけて前の方を見透かしながら、小徑をたよりに歩いて行く。忽ちのうちに、あたりのものは何もかもが闇に包まれて靜まりかへる。——ただ時として鶉の聲が聞こえるばかり。小さな夜の鳥が、音もなく、低く、やはらかな羽を擴げて、翔んで來

て、私に危ふく衝きあたりさうになつたが、おづおづとわきへ外れて行つた。私は藪の縁に出  
て、畑の中を畦道つたひに行く。もう遠くのものを見分けるには骨が折れる。畑はあたりに灰白  
く、その向ふには、刻々と大きな團塊をなして近づきながら、陰鬱な闇が湧きあがつてゐた。い  
よいよ冷えてゆく空氣の中に私の蹻音はかすかに聞こえる。色の薄らいだ空は、またもや青くな  
つて來た。しかも、それはもう夜の青味であつた。小さな星が空にちらちらと光りながら、微か  
に揺れはじめた。

私が森と思つてゐたのは、暗い、まん圓い丘であつた。「して見ると、ここはどこだらう？」  
と私はまた聲に出して同じことを繰り返して、立ちどまつた。これで三度目だ。そして相談でも持  
ちかけるやうに、四つ足の中では確かに最も利口な、英國種の赤ぶちのわが獵犬ディアンカを見  
やるのであつた。けれど四つ足の中で最も利口なこの犬も、ただ徒らに尻尾を振り、疲れはてた  
眼をやるせなけにほちりとさせたばかりで、これといふうまい分別も授けてくれぬ。犬の前で私  
はきまりが悪くなつて、まるで急に自分の行くべき道が分つたかのやうに、自暴にすんすん歩  
いて行つた。丘の裾を廻ると、深くもない窪地に出る。そのまはりは耕地になつてゐる。俄かに  
妙な氣持に捉へられる。この窪地はぐるりが傾斜をなしてゐて、殆んど、柄のついた罐子そつと  
りの形をしてゐて、底には幾つかの大きな白い石が突つ立つてゐる。——まるで祕密な相談があ

つて、ここまで這ひ降りてでも來たやうだ。——窪地の中が、あまりにもひっそりしてゐて寂し  
く、空はその上にもあまりにも坦々と、もの凄く垂れかかつてゐるので、私の心は縮み上つてしま  
つた。何か小さな野の獸が、石と石との間に哀れけな細い聲で啼いてゐる。私は急いで再び丘の  
上に出た。それまでは歸り途を見つけようといふ望みを失はなかつたが、今は全く道にふみ迷つ  
たものと觀念してしまつた。今はもう殆んど霧の中に没れ去つたあたりの地形を見きはめようと  
する氣も更になく、私は眞直ぐに星をたよりに、あてもなくすんすん歩き出した。……足をやう  
やく引きすつて半時間ほどもかうして歩いてゐるのだ。生まれてこの方、こんな荒涼たるところ  
へは一度として來たことがないやうに思はれた。どこを見ても火の光一つ見えず、物音一つ聞こ  
えなかつた。だからならになつた丘は丘に連なり、野は涯しなく野に連なり、藪は私の鼻先へ地べ  
たから不意に湧き出したかのやうに見える。私はなほも歩きつづける。そしてもうどこかで朝ま  
で野宿しようといふつもりになつてゐると、急に怖ろしい淵の上に出てゐるのであつた。

私は踏み出した足をひよいと後に引いた。微かに明るい宵闇を透かせば、はるか下の方に廣い  
平原が見える。廣い川が平原を半圓形にめぐつて、向ふの方へ流れてゐる。鋼鐵いろの、時をり  
微かに閃く水の照りかへしに、川筋がそれと知られる。私の佇つてゐる丘は急に殆んど垂直な斷  
崖に盡き、巨きな斷面は蒼味を帯びた虚空を背景に、くつきりと黒く浮き出し、眼の前の丘の斷

崖の眞下、動かない暗い鏡のやうな川のほとり、断崖と平原とが結びつく片隅には、二つの火が並んで、赤い焰をあけて燃えたり煙つたりしてゐる。火をとり巻いて人がうごめき、影が揺れる。また折々は小さな捲毛の頭の前面が、くつきりと照らし出される……。

ここで私は自分の迷ひ込んで来たところが分かつた。この草原は私たちの地方でビュージンの草原といつて、評判の高いところであつた……。しかし、もう家に歸れる見込みはない。殊に夜分のことで、足は疲れ切つて、竦んでしまつてゐる。仕方がないから火のある所に近づいて、家畜商人らしく見受けられる人たちの仲間に入つて、夜明けを待つことに覺悟を決めた。私は無事に崖を降りて行つた。ところが、最後に掴まへてゐた小枝をいざ放さうといふところへ、矢庭に二匹の大きな白い老犬が怨めしさに吠えかかつて来た。子供らしい甲高い聲が火のまはりから聞こえて来て、二三の少年がひよいと地べたから立ち上つた。誰だと叫ぶ子供らの聲に應へる。子供らは私に近づいて来て、わがディアンカがひよつこり現はれたに殊更びつくりしたらしい犬を呼び戻す。私はみんなのゐる方へ近づいた。

火のまはりに坐つてゐる人たちを家畜商人と見たのは間違ひであつた。これは何のことはない、馬の群れの番をしてゐる隣村の百姓の子供らなのであつた。私たちの方では、夏の暑い頃になると、夜分に馬を逐ひ出して、草を食べさせる。晝間は蠅や蛇がうるさいからであらう。馬の

群れを日の暮れぬ前に追ひ出して、翌くる朝、夜の白む頃に追ひかへす、——これが百姓の子供たちにとつては非常な楽しみなのである。帽子をかぶらずに、古ぼけた膝つきりの外套を着て、ひどく威勢のいい百姓馬に跨がり、楽しさうな喊聲をあげたり、喚いたり、手足を振りながら駛つては、高く跳びあがつたり、聲高く笑つたりする。軽い埃りが黄色な柱のやうに立ち上つて、街道について疾る。よく揃つた蹄の聲が遠くの方まで響き渡り、馬は耳をびんと立てて駈けて行く。先頭第一には尾をふり上げて、絶えず歩調を變へながら、ふり亂した鬘に牛蒡の種をつけて、栗毛の老毛といつたやうなのが駛つて行く。

私は道に迷つたことを少年たちに話して、そのわきに腰をおろす。子供たちは私にどこから来たのかと訊ね、それから暫く口を噤んで、わきの方へ寄つてくれた。私たちは少しばかり話をした。ぐるりを馬に、齧られた小さな灌木の蔭に身を横たへて、私はあたりを見廻しはじめた。それは實にすばらしい光景であつた。焚き火のまはりには、圓い紅らみがかつた光の環がふるへて、闇に吸ひかこまれて消えてしまつたのかと思はれる。焰は時をりばつと燃えあがり、光の環の外までも急速な反射を投げ散らす。かほそい光の舌は、花も葉もない楊の枝を一舐めして、そのまま消え失せてしまふ。すると今度は尖つた、長い影が自分の方から忽ちのうちに侵<sup>し</sup>び込んで来て、火の眞際までおし寄せて来る。闇が光と組打ちをするのだ。時として、焰の勢ひが弱くな

つて、光の環が狭められると、襲ひかかつて来る闇の中から、だしぬけに鼻づらの白い栗毛や、眞白い馬の首があらはれて、すばやく長い草を嚙みながら、まじまじと、ほんやりした眼をして私たちを見つめ、またうなだれる、かと思ふと忽ちにかくれてしまふ、後にはただ相變らず草を嚙む音、鼻を鳴らす音が聞えるばかり。光のあたるところからは、闇の中でしてゐることが、なかなかに見分けがつかぬ。だから、手近にあるものまで、何もかもが黒い幕にでも隔てられてゐるやうに見える。が、はるかに遠く、地平線に近いあたりには、丘や森が長く點在してゐるのが見える。暗いながらも澄み渡つた空は神祕的な壯麗さをたたへながら、私たちのうへに嚴かに、涯もなく高くかかつてゐる。あの一種特別な、疲れを誘ふまでの、爽かな香ひ——ロシアの夏の夜の香りを吸ひ込むと、胸は心地よく締めつけられるやうだ。あたりには殆んど物音一つ聞こえない……、ただ稀れに、近くの川にだしぬけに大きな魚が飛び跳ねて水音を立てると、寄せ来る波にわづかに揺れて、汀の葦が微かにそよいでゐるばかり……。焚火ばかりが靜かに、ぱちぱちと爆<sup>は</sup>せてゐる。

子供たちは火のまはりに坐つてゐる。そこにはさつき私に嚙みつかうとした二匹の犬も坐つてゐる。犬は私が傍にゐるので永いこと心を落ちつけることが出来ず、睡たけな眼を細め、横目で火の方を見ながら、時をり自分たちの威嚴を極度に感じて唸つたりした。最初は唸るだけであ

つたが、後には思ひ通りにならないことを悲しむかのやうに、いくらか泣き聲になつて来た。少年たちは、フェーチャにパウルーシャに、イリニーシャにコスチャにワーニヤ、全部で五人であつた。(この名前は、話を聞いてゐて承知したのであるが、いま私はこの少年たちを讀者諸君に御紹介しようと思ふ。)

先づ一番年かさなのがフェーチャで、年頃は十四くらゐに見える。すらりとした子で、きれいな、ほつそりとした、いくらか小づくりな顔をしてゐて、捲毛の、光澤のある髪に、ぱつちりした眼をし、いつも半ば愉しうな、半ば呑氣さうな微笑みを浮かべてゐる。様子を見るのに裕福な家庭に育つたらしく、この野原へ来たのも暮らし向きの必要からでなく、ただ何となく慰み半分に來たものらしい。黄色い縁をとつた華やかな更紗の襦衣を着て、小さな新しい百姓外套<sup>シヤク</sup>を引つけてゐるが、それが撫肩<sup>なでかた</sup>から今にも滑り落ちさうになつてゐる。淺黄の帯には梳櫛<sup>かみ</sup>がさがつてゐる。胴の淺い長靴は、たしかに自分のもので、親父ゆづりではなかつた。次の少年パウルーシャは縫れた黒い髪の毛に、灰色の眼をし、頬骨が廣く、蒼白い、痘痕<sup>あざ</sup>顔をして、口は大きいながらも締まりがあつて、頭は俗にいふ『麥酒罐』ほど大きく、體はすんぐりしてゐて不恰好である。この少年は決して器量よしではなかつた、——それは否むわけには行かない。しかも私はこ

\* 梳櫛 腰帯に梳櫛を下げて持つて歩いてゐるなんぞは相當なハイカラである。

の子が氣に入つた。まことに利口さうで、率直で、またその聲には力がこもつてゐた。着物は人に自慢の出来るやうなものではなかつた。身につけてゐるものといへば粗末な手織の襦袢と、補綴のあつた股引だけである。三番目のイリュエーシャの顔は甚だ振はなかつた。鈎鼻にしよほしよほした眼、間のびのした輪廓、すべてが一種の愚鈍らしい病的な焦心をあらはしてゐた。固く結んだ唇はいささかも動ず、引き寄せられた眉は弛むことなく、——絶えず焚火が眩しいので顔を撃つてゐるやうな恰好である。黄いろい、といつても殆んど白に近い髪の毛は、しよつちゆう兩手で耳の上まで引つ張り下ろしてゐる低いフェルト帽のかけから、尖つた鰭のやうにはみ出しでゐる。新しい木の皮杓と脚絆を穿いて、胴のまはりを三重に巻いてゐる太い繩は、さつぱりした黒の長襦袢をびつたり締めつけてゐる。この子もパウルーシャも見たところでは十二を越してゐまい。四番目のコスチャはまだ十歳そこそこの少年で、その物思はしげな、悲しさうな眼つきは私の好奇心をそそる。顔は大きくなく、痩せてゐて、雀斑があつて、栗鼠のやうに顎が尖つてゐる。唇はやつと見分けがつくくらゐに薄い、大きい黒味がちの光る眼は、みづみづしく輝いて、異様な印象を與へる。口では——少くとも彼の口では、——言ひあらはすことの出来ない或るものを、この眼が語らうとしてゐるやうに見える。彼は背が小さく、弱々しさうな身體つきをしてゐて、身なりもかなりに見すほらしい。残る一人のワーニャこれは最初、私の眼にとまらな

かつたが。この子は席をかぶつて、おとなしく丸まつて、地べたに寝ころんでゐた。ただ時をりには亞麻色の捲毛の頭をのぞかせてゐた。この子はせいせい七つ位であつた。

かうして私はわきの灌木の蔭になつて、子供たちの様子を眺めてゐた。小さな鍋が一方の焚火にかかつてゐて、鍋の中には『馬鈴薯』が煮えてゐる。パウルーシャは鍋を番をし、跪づいて、沸り出した湯の中へ木串を突つこんでゐる。フェーチャは外套の裾を伸べて、頬杖をつきながら横になつてゐる。イリュエーシャはコスチャのわきに坐り、相變らず一生懸命に眼を細めてゐる。コスチャは少しくうなだれて、どこか遠くの方を見てゐる。ワーニャは席をかぶつて身動きだもしない。私は眠つたふりをした。子供たちは又ほつりほつり話を始めた。

最初はみんなが、あれやこれや、明日の仕事のことや馬のことなどを、とりとめなく話してゐたが、不意にフェーチャがイリュエーシャの方を向いて、中斷されてゐた話を引き戻すやうな風をして、彼に訊ねた。

「そんなら、何かい、お前はほんとに家魔を見たのけ？」

「うんう、見ねえよ、ドモライは見らんねんだもの。」とイリュエーシャが噎れた、低い聲で答へたが、その聲音は顔の表情とこの上もなく釣り合つてゐた、「おれは聲を聞いただけなんだよ……、それも俺ばかりぢやねえんだ。」

「お前ら方のどこにゐるんだ？」とパウルーシヤが訊く。

「あの古い紙漉場によ。」

「おめえら、工場さ行つてんのか？」

「行つてつとも。おらアヴヂューシカ兄ちやんと、伸方やつてんだぞ。」

「あれ、お前は職人なんだな……」

「さあ、それぢやどうして聞けたんだい、その聲は？」

「あの、な。俺とアヴヂューシカ兄ちやんと、フォードル・ミヘーフスキイト、イワーシカ・カスイト、赤丘から来たもう一人のイワーシカと、イワーシカ・スホルコフと、それからもつとゐたんだ。みんなで十人位ゐただけ、みんな當番の組で、紙漉場さ宿直になつたんだ。本當の宿直つていふわけぢやないんだけど、監督のナザロフが歸さねんだもん。『お前ら、家へ歸りてえつたつて、明日は仕事があるんだから、歸つちやなんね。』つて。それで俺ら残つて、みんな一緒にごろ寝してたんだ。そしたらアヴヂューシカが、さあ、家魔が出たらどうする？なんて言つたんだ……。アヴちやんが、まあ言ひ切らねえ内に、ふいっとなんか俺らの頭の上を歩き出したんだ。俺らは下に寝てんのに、そいつは上の車輪の邊を歩き出したんだ。じつと聞いてたら、歩いてて、歩きたんびに踏み板がしなつて、みしみしするんだ。それから

俺らの頭の上を通り過ぎてしまふと、急に水がさらさらさらつと水車に流れ込んで、水車がぎいこつとんと鳴つて廻り出した。樋の口は外づしてあんのにな。誰が口を上げて、水を落したんだか、俺ら不思議でしやうがね。でも、水車は暫く廻つて、それきり止まつちやつたんだ。やがて、足音は上の戸んところへ行つて、梯子段を、こんな風に、何だか急いでもるねえやうに、ゆつくりゆつくり降りて来るんだ。梯子段も歩くと唸るやうな音を出して……。そのうちに、いよいよ俺らの部屋の戸口まで来て、暫くのあひだ、待つてゐる、——そしたらひよいと戸が一ぱいに開いちやつたんだ俺ら、たまけちやつて、見ると、何にもゐねえ……。ふいっとなんか大桶のわきの流桁が動き出して、持ち上つて、水に浸つたかと思ふと、水の外を歩いて、こんな風に歩いて、まるで誰かが、濯いでるやうだつて、また元んところへ歸つちやつた。さうすると今度は他の大桶のそばにあつた鉤が釘からはづれて、また元の釘に引つかかる。それから今度は誰か戸口の方へ行つたやうだと思つてたら、いきなり咳をしはじめた。何でも羊みたいだよ。それからごほんごほんやつたんだ……。俺らみんな一かたまりになつて、お互ひに、からだの下に頭を突つこんぢやつたよ……。あの時はほんとおつたまけたなあ！」

「ほう、さうかい！」とパウエルが口を出した、「だが、一體、あいつは何だつてまた咳な

\* パーウエル　これが正式の名前で、パウルーシヤは愛稱である。

んぞしたんだか？」

「知んね。きつと濡つほいからかも知んね。」  
暫く誰もが黙つてゐる。

「どうした、」とフェーチャが訊く、「馬鈴薯は煮えたかな？」  
パウルーシャが突ついてみる。

「駄目だ。未だ生だ……。あれ、何だか跳ねたぞ。」川の方へ顔を向けて、彼はかう付け足した、「きつと、梭魚だ……。あれ、星が飛んだ。」

「いや、みんな、お話をすることがあるんだ。」とコスチャが細い聲でいひ出した、「あのな、この間、父ちゃんの話してくれたことなんだがな。」

「よし、聞かして貰はう。」とフェーチャが、尻押し顔にいふ。

「お前ら、ガヴリーラを知つてつか、あの大村の大工がこと？」

「うん、知つてつとも。」

「んぢや、どうしてあいつがあんなにいつも陰気な顔して、物を言はねんだか、知つてつけ？ あんなに陰気なのはな、かういふ譚なんだよ。父ちゃんが話して聞かしたんだけど、あの人がな、胡桃とりに森さ行つたんだと。うん、胡桃とりに森さ行つただけで、道まぐれつちやつて

よ。どんどん入つてつちやつて、とんでもねえ所さ入り込んぢやつたのよ。一生懸命にあちこち歩き廻つたけど、それでもなあ、駄目よ！ 道なんざ見つかんね。表はもう眞つ暗くなつた。それで仕方がねえんで、樹の下さ坐つて、『朝まで待つべ』と思つたんだと。坐つてたら、居眠りし出したんだ。うとうとやり出したと思つたら、急に誰かが呼ぶ聲がする。見たつて、誰もるねえ。またうとうとやり出すと、また呼ぶ聲がする。今度はようやく眼をあけて見ると、前の樹の枝に水妖がゐる、からだをゆすぶりながら、大工を呼んでゐる。息がとまりさうなくらる笑つて、笑つて、さんざん笑つてゐる……。それにお月さまは眞つ晝間のやうに、とてもとても明るいので、何から何まで見えるんだ。水妖はやつぱり大工を呼んでゐる。水妖は體ぢゆうが透き通るやうに白くつて、枝さ腰かけてる。ちやうど鱧か、白楊魚みたい、——でなけりや、ほら、あんなに白つほくて銀色なのは鮎だな……。大工のガヴリーラはほうつと気が遠くなつちやつたのに、水妖の方ちやあ、やつぱし笑つて、來い來いつて、手で招んでゐるんだと。ガヴリーラはすんでのことで起き上つて、水妖のいふことを聴くところだつたが、きつと神様が教へて下すつたんだな、いきなり氣がついて十字を切つたんだつて……。その十字を切んのは、とても大へんだつたと。手がほんとに石みたいになつて廻らなかつたつてな。ああ、なんておつかねえことなんだろ！……それで、やつと十字を切つたんでな、水妖は笑ふのをやめて、急に泣き出したんだ、：

泣いてな、眼を頭髮の毛で拭くんだけど、水妖の毛つていふのは、まるで大麻みてえに碧いんだぞ。それでガヴリーラがじつと水妖を見て、よく見て、訊き出したんだ、「おい、森の精、何だつて泣くのだけ？」つて。すると、水妖はかういつたつてよ、「これ、人間よ、お前さんが十字なんかを切らなかつたら、死ぬまで私と一しよに面白く暮らせたものを。お前さんが十字なんか切るものだから、私は悲しくつて泣いてるんだよ。けれど、私ひとりばかりが悩みはしないよ。お前さんだつて、生涯、悩みつづけるやうにして上げるわ。」さういふんだ。と思つたら、消えちやつたんだ。すると直ぐにガヴリーラに分つて来たんだ、どうしたら森の中から出られつか、分つて来たんだ……。その時からだよ、あんなにいつも陰気な顔をしてんのは。」

「へえっ！」と暫くのあひだ黙つてゐたフェーチャがいふ、「だつて、どうしてあんな山鬼なんぞが、そんなに基督信者の魂を荒らせるのかな、だつて、ガヴリーラだつて、そいつのいふことを聴かなかつたんぢやねえけ？」

「ああ、そしてな、見ろ、お前！」コスチャがいふ、「ガヴリーラの話ぢや、水妖の聲は蝦蟇みてえに、悲しさうな聲だつてよ。」

「お前のお父つあんが、それを話して聞かしたのかい？……」フェーチャがつづけていふ、「うん。おら、天井床に寝てて、すつかり聞いたんだ。」

「きたいな話だなあ！ どうして大工は悄氣てんのかな？……さうすつと、きつと水妖はガヴリーラが氣に入つたんで、それで呼んだんだな。」

「うん、氣に入つたんだよ！」とイリューシャが相槌をうつ、「さうだとも！ 水妖はガヴリーラを擦んべと思つたんだな、きつと、さう思つたんだ。擦んのが商賣なんだよ、あの水妖なんどの。」

「けんど、ここいらにも、きつと水妖がゐるんだんべ。」とフェーチャがいふ。

「るねえよ、」とコスチャが答へる、「ここらはきれいで、明けつ放しな所だもの。ただ、川が近くにあるけんど。」

誰もが黙り込んでしまつた。不意にどこか遠くの方に、呻くやうな、物音が、長く尾をひいて、響き渡る。時をり、深い静寂の中に起つて、上へ上へと昇つて行つて、暫く空中に漂ひ、やがて、靜かに吹き散らされてゆく、あの名状しがたい夜の物音の一つである。耳をすましてみても、何も聞えないやうで、それでゐて、やはり鳴り響いてゐる。誰かが、地平線のあたりで、長々と叫び聲をあけると、も一人、誰かほかの者が、森の中から細い、鋭い笑ひ聲でそれに應へ、微かな、しうといふやうな音が川のおもてを走つてゆくかのやうに思はれる。子供たちは顔を

\* 天井床　ロシアの百姓家で、天井に近いところに設けてある寢床。



見合はせて、身慄ひした。

「俺たちには神様がついて下さる！」とイリュエーシャが呟く。

「やい、臆病鳥！」とパーウエルが叫んだ。「なに魂消てんだ？ 見ろ、馬鈴薯が煮えたぞ。」  
(一同は鍋のそばへ寄つて来て、湯氣の立つ馬鈴薯を食べ始めた。ただワーニャだけは身動きも  
しなかつた。)

「おい、どうしたんだ、おめえ？」とパーウエルがいふ。

けれども彼は席の下から匍ひ出して來なかつた。鍋は忽ち空になつた。

「あのな、お前ら、聞いたか、」とイリュエーシャがいひ出した。「この間、おら方のワルナギ  
ーツイであつたことを？」

「あの、土堤の上でけ？」

「うん、さうだ、あの土堤の上だ。切れた土堤の。あすこはとつても氣味わるいとこだ、さむ  
しいとこだぞ。今にも化物が出さうなとこだぞ。まはりに窪つたまりだの、谷だのばつかしあつ  
て、谷の中にはいつも蛇くちなはがゐるんだ。」

「うん、それで、どんなことがあつたんだい？ 話して聞かせろよ……。」

「あのな、こんなことがあつたんだ。フェーチャ、きつとお前、知んめえけど、おら方のあ

すこにはな、土左衛門が埋まつてんだ。昔々、池がまだ深かつたところに土左衛門になつちやつた  
んだ。墓場はまだ見ええら。少し見ええら。こんなにな、土饅頭がな……。それでな、先頃、お邸の  
番頭が、獵犬番のエルミールを呼んで、「エルミール、驛遞へ行つて來う。」つて言つたんだ。  
おら方のエルミールはしよつちゆう驛遞さ行くのが役目だつたんだ。自分の預かつてゐた獵犬を  
みんな死なつしやつたんで。何でだか知んねけど、エルミールの手にかかると犬が生きてかね  
んだ。本當にいつも生きてたこたあねえんだ。いい獵犬番でな、非のうちどころのねえ人間だけ  
んど。それでな、エルミールは郵便とりに馬に乗つてつて、町でぐづぐづして、歸りにはもう酔  
つぱらつてた。その晩は明るい晩で、お月様も照つてゐた……。かうしてエルミールは土堤のと  
ころにさしかかつた。通り道だから仕方がね。そこを獵犬番のエルミールが馬に乗つて來ると、  
土左衛門の墓のうへに、小羊が、眞つ白い、縮れつ毛の可愛らしい小羊が行つたり來たりしてゐ  
る。それでエルミールは『よし、一つあいつを捕まへてやらう、——なんで逃すもんか』と思つ  
て、馬から下りて、両手で抱き上げたんだ……。それでも羊は平氣の平左なんだ。エルミールが  
馬のそばまで來ると、馬は鼻を鳴らしながら飛びのいて、しきりに首を振るんだ。それでも、そ  
の人は『どうどう』と馬にいつて、羊を抱いたまんま馬に乗つて、また進んで行つた。羊を胸の

\* 魔除けの文句。

ところへ抱へて。エルミールが羊を見ると、羊もじいつとエルミールの顔を見るんだ。こんなに。それで、獵犬番のエルミールも氣味が悪くなつて來た。『羊がこんなに人の顔を見つめるなんて、まだ聞いたことのないことだ。』と思つたが、別に變つたこともない。こんな風に羊の毛を撫でて、『羊、羊、羊、羊』つていつたんだ。さうすると、直ぐに羊も齒をむき出して、『羊、羊、羊、羊』つていふんだつて……』

この話をしてゐた子供が、まだこの最後の言葉を口にするかしないうちに、いきなり二匹の犬が一せいに跳ね起きて、聲すさまじく吠え立てながら、火のそばから駈け出して、闇のなかに消えて行つた。子供たちはみなぎよつとした。ワーニャは席の下から跳ね起きる。パウルーシヤは大聲をあけながら犬のあとを追ひかける。犬の吠える聲は忽ちに遠くなつた……。驚いた馬の群れが右往左往するただならぬ蹄の音が聞こえる。パウルーシヤは大きな聲で叫んでゐる、『白！』  
「黒！」……やがて吠える聲がやむ。パウルーシヤの聲はもうかなり遠くの方から聞こえて來る……。また暫く經つ。子供らは何ごとかが起こるのを豫期してでもゐるかのやうに、そはそはしながらあたりを見まはす……。不意に飛ばして來る馬の蹄の音が聞こえる。馬は薪の積んであるすぐ側にはたと止まる。蠶にしつかりつかまつて、ひらりとパウルーシヤが飛び降りる。二匹の犬はまたもや光の環の中へ駈け込んで來て、赤い舌を出しながら、直きに坐る。

「何がゐた？ 何だ？」子供たちが訊く。

「何でもないよ。」パウルーシヤは手で馬を逐ひのけて答へる。「きつと犬が何か嗅ぎつけたんだよ。俺は狼だと思つた。」胸一ぱいに、せはしく呼吸をしながら平氣な聲で附け加へる。

私は思はずもパウルーシヤの姿に見とれた。このときの様子はまこと立派だつた。早駈けのために活氣づいた不器量な顔は、剛膽と堅い決心とに燃えてゐた。宵闇に捧きれ一つ持たず、彼はいささかもためらふことなく、ただひとり狼を目ざして突き進んで行つたのだ……。『何ていふ豪い子だらう！』と私は彼を眺めながら考へた。

「それぢや、あの、みんならは狼を見たことあんのけ？」と臆病者のコスチャが訊ねる。  
「ここらにや何時でもうんとゐる。」パウルーシヤが答へる、「それでも、冬だけだよ、怖  
えのは。」

彼はまた焚火のまへにうづくまつた。地べたに腰をおろしぎはに、一匹の犬のむくむくした頸に手をかけた。御機嫌をとられた犬は有難さと得意さを感じてゐるらしく、時をり横目にパウルーシヤの方を見ながら、いつまでも首を動かさなかつた。

ワーニャはまた席の下にもぐり込んだ。

「イリュエーシヤ、さつきの話は、ずるぶん怖えな、」とフェーヂヤが話し出した。裕福な百

姓の息であるから、いつも音頭取りにならなければならぬ（尤も自分では口敷をきかない。自分の品位をおとすのを怖れてでもゐるかのやうに）。「それで、さつき犬が吠えたのは、何かの化け物が吠えさせたんだよ……、うん、さうだ、おれも聞いたよ、お前ら方のあすこは氣味悪い所だつたてな。」

「ワルナギーツイか？……きまつてら！……あすこはとつても氣味わりいとこだよ！ あすこでは、何べんも大旦那様を、——死んだ旦那様を見た人があるちけよ。裾の長い上衣カウケンを着て、行つたり來たりして、いつもかうして溜息ついて、地べたを見まはして、何だか搜してんだちけ。一度はトロフイームチおいさんが出遭つて、『旦那様、イワン・イワーヌイチ、そんなに地べたを御覽になつて、何をお捜しなすつてらつしやるんですか？』つて訊いたんだよ、……」

「おちいさんがさう訊いたのかい？」とびつくりしてフェーチャが念を押した。

「うん、訊いたんだ。」

「ほう、トロフイームイチは、とても偉かつたんだなあ……、さあ、それで旦那はなんだつて？」

「『錠切草をさがして居るのぢや』といふ返事だつたが、その聲がととても低くつて、『錠切草』つて、こんな風なんだよ。『旦那様、イワン・イワーヌイチ、錠切草なんて、何にな

さるのです？』といふと、『わしを壓しつけるんだ。墓が壓しつけるんだ、トロフイームイチ、だから向ふへ脱け出して樂らくになりたいのだ』つて……」

「ほう、とんでもない！」とフェーチャがいふ、「して見ると、あんまり長生きしなかつたんだな。」

「ああ、たまけた話だ、コスチャが口を出す、「おれはまた、萬聖節の時しか、死んだ人には會へないと思つてた。」

「死んだ人にはいつだつて會へるよ、」と、私の見たところでは、誰よりもよく村の迷信に通曉してゐるらしいイリュエーシャが確信ありけな口吻で引き取つた、「だけど、萬聖節の日には、その年に死ぬ番にあたつてゐる人なら、生きてる人でも見分けられるつてよ。見たければ、夜、教會堂の支關に立つて、じつと街道の方ばかり見てりやいいんだ。さうすると、生きてる人がな、それ、その年のうちに死ぬ人が、道を通り過ぎるんだ。去年は、村のウリヤーナ婆さんが教會堂の支關へ見に行つたんだ。」

「それで、誰を見たんだい？」とコスチャが好奇心をもつて訊ねる。

「見たとも。初めはさるぶん長いこと、じいつと坐つて待つてたけど、誰も見えねえし、な

\* 錠切草 お伽噺に出てくる毒草、その毒草を近づけると錠も門も斷ち切れて寶ものが得られるといふ。

にも聞こえねえ……、ただ犬つころが何處かで、かうして、しきりに吠えてゐる、いつまでも吠えてゐる、そんな気がするんだ……、そのうちにひよいと見ると、小徑を男の子が襦衣一枚で歩いて来る。よく見ると、イワーシカ・フェードセーフがやつて来るんだ……。」

「あの、この春死んだ子供？」とフェーチャがさへぎる。

「うん、さうだ。あれがとほとほ歩いて、顔を上げねえんだ……、それでも、ウリヤーナ婆さんには誰だか分かつたんだ……、でも、それからまた見ると、今度は婆さんが歩いてる。ウリヤーナ婆さんは一生懸命に見ると——、え、たまけるだらう……その道を歩いてる婆さんは自分なんだ。あのウリヤーナ婆さんがな、自分でよ。」

「自分でなんて、そんなことがあるもんか？」とフェーチャが訊ねた。

「ほんとだとも。嘘ぢやねえよ。」

「でも、變だなあ、あの婆さんはまだ死なないぢやないか？」

「だつて、まだ一年とたたないもの。見ろよ、あの婆さんはやつと呼吸をついてるだけなんだから。」

一同はまた静かになつた。パーウエルは枯枝を一つかみ火に放りこんだ。急に燃えあがる焔に枯枝はくつきりと黒く浮き出し、ばちばちと音を立て、煙をあげ、焼けた端の方をいくらか上に

しながら反りはじめる。光の反射は、はげしくふるへながら、四方八方に、わけても上の方に伸びる。不意にどこからともなしに一羽の白い鳩が、まつしぐらに明るい光の中へ飛び下りて来て、燃えさかる火影を一ぱいに浴びながら、一ところをぐるぐると廻る。やがて翼を鳴らしながら消え失せる。

「きつと家からはぐれちやつたんだ、」とパーウエルがいふ、「だからどつかへ出るまで飛んで行つて、出たところで夜明かしをするんだらう。」

「でも、パウルーシャ、あれは正直な人間の魂が天へ昇つて行つたんぢやないかな、え？」

パーウエルは火の中へ、もう一つかみの枯枝を差しくべる。

「さうかも知んね。」つひに彼もいふ。

「ぢや、話して聞かせろよ、パウルーシャ、たのむから、」とフェーチャがいひ出す、「お前ら方のシャラーモヲでも、天の前兆は見ええたのか？」

「お天道さまが見えなくなつた時のことだらう？ そりや、見えたととも。」

「きつと、お前らもたまけたらう？」

「でも俺らばかりぢやねえぞ。俺らの旦那様なんぞ、前から、今度、前兆があるぞつて、俺ら

\* 天の前兆 日蝕のことを私たちの土地の百姓はかういつてゐる。(作者註)

に話してたくせして、暗くなつて來たら、自分でとてもたまけつちやつたさうだ。それから女中部屋ぢや、暗くなつて來たら、料理番の婆さんが、おめえ、直ぐに壺をみんな持ち出して、火掻きで毀しちやつて、籠ん中へ打つ込んだやつたんだ。『もう世の最後の日が來たんだから、今さら物を食ふ人なんかいないぞ』つてな。それで、おつゆがそこら中一ぱいこぼれたんだ。それから、村ぢや、こんな噂があつたつけ。白い狼が世界中を駆けまはつて人間を食つてしまふだの、生餌をとつてたべる鳥が飛んで來るだの、やれ、恐ろしいトリーシカの姿が見えるだらうのつて。』

「そのトリーシカつてのは、どんなの？」とコスチャが訊ねた。

「お前、知らねえのか？」とイリユーシャは熱をもつて引き取つた、「お前、トリーシカを知んねなんて、お前はどこの者だ？ お前の村にや世間知らずが揃つてんだな、井戸ん中の蛙がな！ トリーシカつちふのは、いつかは世の中へ出て來るおつそろしい人間でな、とてもおつそろしい人間で、出て來ても、捉めえることもどうすることも出來ねえんだぞ。みんなが、たとへば百姓が、そいつをつかめべと思つて、棒もつて追つかけて取り卷いたつて、そいつは百姓の眼をくらし、——すつかり眼をくらしちまふもんだから、みんなが同志うちをやるやうなことになるんだ。牢屋へでもぶち込んでみる、さうすると柄杓へ水を入れて來て、飲ましてくれろつていふ、柄杓を持つて行くと、柄杓ん中へもぐり込んで、ふいつと消えちやうんだ。それから鎖

でつないでおくと、ほんとそいつが手を叩く。するともう鎖はばらばらに解けちまふ。まあ、こんな風にして、そのトリーシカは村だの町だのを歩きまはるんだ。このトリーシカは悪智慧がある奴だから、たくさんの基督信者を迷はすんだ……、それでもどうすることも出來ねえんだよ……。本當にあれは悪智慧のある、おつそろしい奴だからな。」

「まあ、さうだ、」パーウェルは持ち前のゆつたりした聲で話しつづける、「そんな奴だよ。つまり、こいつを俺らが方ぢや待つてたのよ。年寄り達は天の前兆が始まると、すぐにトリーシカがやつて來るぞつて言ひ出したんだ。そのうちに、前兆が始まつたのよ。村中の者はみんな、往還だの畑だのへ散らばつて、どんなことになるかと待つてたんだ。おら方は、みんなも知つて通り、見晴らしのいい、廣々としたところだ。みんなが見てると急に大村の方から、妙な男が坂道を下りて來るんだ。とてもおつそろしい頭をしてるんだ……、だから、みんなが『おや、トリーシカが來るぞ。おうい、トリーシカが來るぞ！』つて唳鳴つて、四方八方へ逃げ出したもんだ。名主は濠ん中へ這ひこむ、奥様は門の下の嵌め板にはまつて、命がけで唳鳴る。あんまり唳鳴つて飼ひ犬をびつくりさしたもんだから、犬は鎖をちぎつて、籬を越えて森ん中へ逃げこんだ。それからクジカの親父のドロフェーキツチは、燕麥の畑ん中へ駆け込んで、ちよこんと尻餅をついたまま、鷄みたいな聲を出して、『いくら人殺しの悪黨でも、小鳥ぐらゐは見逃しなさる。』と



「あ、ほんとにさうかも知んね、」とコスチャが、それでなくても大きい眼を一そう大きくして相槌をうつた。「俺あ、アキームがあの水つ溜りに沈められたのを知んなかつた。知つてたら、あんなにたまけなかつたな。」

「けんど、あそこにや、こんなちび蛙がゐるちけよ、」とパーウェルが言葉をつづけて、「それがあんなに悲しさうに鳴くんだと。」

「蛙？ なあに、あれは蛙ぢやねえよ、……あれが何で……（蒼鷺がまた川の上で鳴いた）——あれあいつ奴！」コスチャは思はずも口走つた、「まるで山靈が鳴いてるやうだ。」

「山靈は鳴かないよ。啞だもの。」イリュエーシャが口を出す、「ただ手をたたいて、木の枝をばちばちと鳴らすばかりだよ……」

「ぢや、お前、見たことあんのか、山靈を、え？」フェーチャが嘲るやうに茶々を入れる。

「うんう、見たことはねえよ。見てたまるもんか。でも、ほかの人は見たつてよ。ついこの間も、おら方の百姓が引つぱり廻されたんだよ。森の中をどんどん引つぱり廻されたんだけど、いつも同じ、森の草つ原のまはりばかり歩かされたんだ……それで、夜の白む頃にやつと家へ歸れたんだ。」

「ぢや、その百姓は山靈を見たんだな？」

「うん、その人の話ぢや、でつかい、でつかい奴で、立つてるんだけど、身體ぢゆうが黒つほくて、まるで木の蔭にでもゐるみたいで、よく、見分けがつかねえんだつて。何だかお月様に見られねえやうにかくれてるらしいつて、それで、でつかい眼で、じろじろ見つめて、眼をばちくりばちくり、しきりにやつてんだつて……」

「止めろよ、お前！」フェーチャは軽く身慄ひして、肩をすくめながら叫んだ、「ちえっ！」

「一體、何だつてそんな汚らはしいものが世の中に擴がつてるんだらう？」とパーウェルがいふ、「ほんとに！」

「そんなに悪口いふなよ。聞えるから。」とイリュエーシャが注意した。またもや一座が静まりかへる。

「見ろ、見ろ、みんなら、」とだしぬけに子供らしいワーニヤの聲が聞こえる、「見ろ、天上の小さい星を。蜜蜂みたいに、ごちやごちや集まつてるよ！」

彼は席の下から初々しい小さい顔をつき出して、小さな拳で頬杖をつき、大きな、おとなしさうな眼を静かに上へ向ける。子供らの眼は一せいに空に注がれて、直ぐには伏せられなかつた。

「どうだい、ワーニヤ、」とフェーチャがやさしく言ひ出した、「お前の姉のアニエートカは丈夫か？」

「丈夫だよ。」とワーニャが舌たるく答へた。

「どうして、おら方さ遊びに来ないのかつて、さう言つとくれ……」

「おら、どうしてだか知んね。」

「遊びに来るやうに言つてくろ。」

「ああ。」

「いい物をやるからつて、さう言つて。」

「ぢや、おれにもくれる？」

「やるとも。」

ワーニャはほつと溜息をついた。

「でも、おら、要らねえよ。それよか姉あんなにやつてくろ姉あんなはみんなを、とてもよくしてくれるんだもの。」

かういつてワーニャはまた頭を地べたに押しつけた。パーウェルは立ち上つて、空からになつた鍋を手にとつた。

「どこへ行くんだ？」とフェーチャが訊く。

「川さ水汲みによ。水飲みたくなつたから。」

二匹の犬も立ち上つて、そのあとをついて行く。

「氣をつけて、川ん中さ落つこちんなよ。」イリュエーシャが後から聲をかける。

「なんで落つこちるもんか？」フェーチャがいふ、「あれは氣をつけてるもの。」

「うん、そりやさうだがな。でも、いろんなことがあるからな。それ、屈んで水汲むだらう。」

さうすると、河童カワコウが手をつかまへて、水ん中へ引つ込むかも知れないよ。さうすつと、後でみんなが、あの子は水へ落つこちたつて、さういふだらう、……けども、落つこちたんぢやないよ！

……ほうら、葦ん中へ這ひ上つた。」彼は耳を傾けながら言ひ足した。

なるほど葦が押し分けられて、私たちの方で俗にいふ『さやさや』といふ音を立てる。

「ほんとかな、あれは」とコスチャが訊ねる、「あの馬鹿のアクリーナが水ん中に落つこちて

から、氣が違つたつていふのは？」

「さうよ、あの時からだよ……今ぢやあんなさまになつて！ それでも元は好い女だつてつて。河童カワコウに崇たつられたんだよ。きつと、河童は、みんながあんなに早くアクリーナを引き出すなんて思はなかつたんだよ。それであの、水の底で崇たつつたんだな。」

（私もこのアクリーナには一再ならず會つてゐる。襤褸をまとひ、恐ろしく痩せ細つて、炭の

\* 河童カワコウ 民譚に出てくる川や淵にゐる極めて性悪な悪魔。



やうに眞黒な顔をし、濁つた眼つきをして、いつも齒をむき出し、ともすると道の眞ん中に、骨と皮ばかりの両手をしつかりと胸にあてて、檻の中の野獸のやうに、そろそろとよろめきながら、何時間も一つとところで足踏みしてゐる。何をいつても通じないで、ただ時をり引き吊つたやうに高笑ひをするばかりである。)

「みんなの話だと、」コスチャがつづける、「川へ身投げしたのは、色男に欺されたからだつて。」

「ほんとだ。」

「それから、ワーシヤを覚えてつか？」

悲しげな聲でコスチャが附け足す。

「どのワーシヤよ？」とフェーチャが訊ねる。

「ほら、あの、この川へ落つこちで死んだのよ。」コスチャが答へる、「やつぱりこの川でだ。何て可愛い子だつたかなあ！ああ、とてもいい子だつたがなあ！おつ母さんのフェクリスタはあのワーシヤをどんなに可愛がつたか知れないんだ！フェクリスタには、あの子に水の崇りがあるつてことは、蟲が知らしたと見える。夏なんか、ワーシヤと俺ら、子供ら仲間、小川さ水浴びに行つたりすると、おつ母さんは慄へ上つて氣を揉んだんだ。ほかのおつ母さんたちは

何でもねえ、手桶もつてそのそばを往つたり來たりして、えつちらおつちらしてるのに、フェクリスタは手桶をおろして、「お歸り、坊や、お歸り！ああ、お歸りよ、いい子だから！」つて呼ばつてたんだ。一體、どうして水へ落つこちたんだか、誰も知らねえんだよ。川つぶちで遊んで、おつ母さんもその邊にゐて、乾草を掻き寄せてたんだ。そして、ひよいと氣がつくと、誰か水ん中で泡ふいてるやうな音がした。よく見ると、もう水の上にはワーシヤのしやつほばかりが浮かんでるんだ。それからだよ、フェクリスタが氣が變になつちやつたのは、川つぶちへ行つては、ワーシヤの落つこちたところへ寝そべつて、歌うたつてるんだ。ほれ、ワーシヤがいつもあんな歌をうたつてたらう。あの歌をフェクリスタもうたひながら、泣いて、泣いて、神様にさんざん泣き言をいつてるんだ……」

「ああ、パウルーシヤがかへつて來た。」とフェーチャがいふ。

パウエルは水をいっばいに入つた鍋をもつて、焚火のところへやつて來た。

「おい、みんなら、」一寸のあひだ黙つてゐるが、やがて彼は言ひ出した、「變なことあつたぞ。」

「何がよ？」コスチャが急ぎ込んで訊ねる。

「ワーシヤの聲が聞こえたんだ。」

みんなは一せいに身慄ひした。

「何だつて、おい、何だつて？」とコスチャが廻らぬ舌でいふ。

「ほんとだよ。おれが水波まうと思つて、ここんだら、いきなりワシヤの聲で、水の底から聞こえてくるみたいだ。『パウルーシヤ、パウルーシヤ、こつちへおいで。』つて、かういつて呼ぶ聲が聞こえるんだ。おらあ、逃げて来た。でも、水だけは波んで来たよ。」

「ああ、どうしよう、どうしよう！」と子供たちは十字を切りながら口々にいふ。

「パーウエル、そりや河童が呼んだんぢやないか、」フェーチャがなほも言葉をつづける……

「こつちぢや丁度いま、あのワシヤの話をしてたところだ。」

「ああ、縁起が悪い。」とイリュエーシヤが一句一句に間を置いていふ。

「なあに、大丈夫だよ、かまふもんか！」とパーウエルはきつぱり言ひ放つて、また腰をおろした。「どうせ運は免れらんねえんだもの。」

子供たちは、静かになる。見たところ、パーウエルの言葉が子供たちに深い感銘を與へたらしい。子供たちは、いよいよ眠らうとでもしてゐるらしく、焚火の前に横になり始めた。

「あれは何だ？」と不意にコスチャが頭をもたけて訊いた。

パーウエルは耳をすました。

「あれは山鷓鴣が鳴きながら飛んでるんだよ。」

「どこへ飛んで行くんだらう？」

「向ふの、冬のねえつち所へよ。」

「そんな國があんのか？」

「あるとも。」

「遠くにか？」

「遠く、遠くの、暖かい海のむかふだよ。」

コスチャはほつと溜息をついて、眼をとぢた。

すでに私が子供たちのそばへ腰を下ろしてから三時間あまりになる。月はやうやく昇つて来たが、すぐには眼につかなかつた。あまりに小さな、細い月であつたから。この月の光のたよりない夜は、前と同じやうに、すばらしい感じがした……。しかし、つい今しがたまで空高くかかつてゐた多くの星は、もはや暗い地の果てに傾いてゐた。あたりのものは何もかもが、常に夜の明けぎはにのみ見られるやうに、聲もなく静まりかへつてゐる。何もかもが深い静かな夜明け前の眠りに沈んでゐる。空気のなかにはさして強い匂ひはなくなつてゐる。空気にまたしても露じめりがあふれてゐるやうに思はれる……。夏の夜は永くはない！……子供たちの話は焚火が消える

と共に消えうせる。犬は微睡みさへしてゐる。微かに明るい星あかりに透かして見ると、馬もまた頸を垂れて、やすんでゐた……。快よい懈怠がやつて来る。するうちに私も微睡んでしまつた。

爽かな微風が顔を吹き過ぎる。私は眼をあける——朝になりかかつてゐる。まだ曙の紅の色はどこにも射してゐないが、東の方はもう白みかかつてゐる。淡い灰色の空は明るく、冷たく、青味を帯びて来る。星は微かな光を放つて、瞬いたり消えたりしてゐる。地はしつとりとし、葉は濕り、どこかにいきいきした物音や聲が聞こえる。朝の小風はそよそよと地のうへを吹き渡る。私のからだは軽く、楽しくふるへて風に應へる。私はふと立ち上つて子供たちのところへ行つた。煙つてゐる焚火のまはりに、子供たちはみな死んだやうになつて、眠つてゐる。ひとりパーウエルが身を半ば起こして、じつと私をみつめる。

私は彼に會釋して、うち煙る川に沿つて家路についた。まだ二露里とは歩かないうちに、私のまはりの、廣い露にぬれた草原や、前の方の緑いろがかつた丘や、森から森、またうしろに長くつづく埃の道、赤らむ叢、薄らぐ霧のかけにおづおづと青味を帯びてゐる川に、——最初は鮮紅、次には赤と金との青々しい、燃えるやうな光が奔流のやうにふり注いだ……。何もかもが動き始め、眼をさまし、うたひ、そよぎ、話し始める。輝く金剛石のやうに大きな露しづくが、ここか

しここに燃えあがる。私を迎へるかのやうに、澄んだ朗かな、恰も朝の涼氣に洗ひ清められたやうな、鐘のひびきが聞こえて来る。すると不意に、息をやすめてゐた馬の群れが、さつきの顔見知りの子供たちに追ひたてられて、私のわきをまつしぐらに駆けぬけて行つた……。

残念ながら、私はパーウエルがその年にあの世の人となつたことを附け加へなければならぬ。あの子は溺れ死んだのではなく、馬から墜ちて死んだのである。惜しいことをした、すばらしい奴であつたものを！

## タチヤーナ・ポリソヴナとその甥

親愛なる讀者よ、私に手をお出しなさい、さうして一しよに参りませう。天氣は麗らかである。五月の空は物やはらかに青く澄んでゐる。滑らかな柳の若葉は、洗ひたてたやうに輝いてゐる。廣い平らな道は、羊が好んで嚙む赤らみがかつた莖の小さな草にすつかり覆はれてゐる。長い丘の斜面には、右にも左にも、緑のライ麦が静かに浪をうつてゐる。小さな雲の影は疎らな點を描いてその上を滑つて行く。遠くには森が黒く、池が耀き、村が黄いろく見える。幾百の雲雀は舞ひあがり、歌を唱ひ、眞逆様に落ちて来て、頭をさしのべ、土くれのうへに姿を見せる。白嘴鴉は街道の上を下り立ち、こちらを見ては、何かを啄ばんでゐる。馬車を通すには通す。二度ばかりびよんびよんと跳んで、大儀さうにわきの方へ飛ぶばかりである。谷の向ふの山のうへには百姓が畑を耕して居る。尻尾の短い、蠶のみだれた幼い石垣馬が母馬の後をたどどしい足どりで追ひまはしてゐる。その細い嘶きが聞える。私たちは白樺の林に乗り込む。強い新鮮な香ひに快よくむせかへる。もう村の近くへ來た。馭者は車を降りる。馬は鼻を鳴らしてゐる。

側馬はあたりを見まはし、軸馬は尾を振つて、頸木の方に頭を仰向ける、……大きな門がぎいと開く。馭者は腰をかける、……さあ、行け！ 村は私たちの前にある。屋敷を五軒ほど通り過ぎて、私たちは右に折れ、窪地に下り、堤に乗り上げる。小さな池の向ふに、林檎や紫丁香花の圓い梢の間から、二本の煙だしのある、嘗ては赤かつた板屋根が見えて來る。馭者は生垣を左に沿うて、三匹の古いほれた老犬が、細い唖れた聲で吠えるのを聞きすてて、開け放した門に乗り入れ、廣い屋敷の厩や納屋の傍をぐるりと巧みに廻つて、物置の開いた戸口の高い閤を横向きになつて跨いでゐる年寄の女中頭に威勢よく挨拶し、やがて遂に明るい窓のついた暗い家の上り段の前に馬をとめる、……私たちはタチヤーナ・ポリソヴナの家へ來たのである。やがて彼女は自から風窓を開けて、私たちの方を見てうなづいてゐる、……

「今日は、小母さん！」

タチヤーナ・ポリソヴナは、大きな灰色の飛び出た眼をして、どちらかといへば團子鼻の、頬の紅い、二重顎の、五十ばかりになる婦人であつた。その顔には温情と親切の色があふれてゐる。嘗ては結婚したこともあつたが、間もなく孀になつてしまつた。タチヤーナ・ポリソヴナは實に立派な婦人である。どこへ出かけるといふこともなしに小さな持村に暮らして、近所づきあひもせず、ただ若い人たちにだけ應待して、他の人たちを好かない。もとはかなりに貧しい地

主の家に生れたので、これといふ教育もうけなかつた。といふのは、つまりフランス語が話せないのである。モスクワにさへも一度も行つたことがない、……さて、かういふ缺點があるにも拘らず、質朴に善く身を持して、ものわかりがよくて、物の考へ方も自由で、暮らしの裕かでない奥方によくあり勝ちな悪い癖などにも殆んど染まつてゐない。これには全く驚かざるを得なかつた……。實際、年百年中、草深い田舎に暮らしてゐながら——蔭口をきくでもなし、泣き言を並べるでもなし、お世辭も言はず、騒ぎもせず、歎きに沈むこともなく、好奇心に頼へることもない、……これは驚異であつた！ いつも鼠色の琥珀織の着物を着て、薄むらさきのリボンのさがつた白い部屋帽子をかぶつてゐる。食へることは好きであるが、それも度を過ぎすといふわけではない。ジャムも乾した物も鹽漬けも家政婦にまかせておく。一體、あの女は一日中何をしてゐるのか？ と諸君はお訊ねになるだらう……本を讀んでゐるのか？——いいえ、本など讀んではゐない。實を申せば本の方から御免をかうむるのである……。わがタチャーナ・ポリソヴナは若しお客のない時には、冬ならば窓ぎはに腰をおろして靴下を編み、夏ならば庭へ出て草花を植ゑ附けたり、水をくれたり、仔猫を相手に何時間も遊んだり、鳩に餌をやつたりしてゐる……。こんな風で、殆んど家政の方はおかまひなしである。けれども、いざ自分の好きな近所の若い人でもお客に來たとなれば、タチャーナ・ポリソヴナはすつかり元氣づいて、椅子をすすめるや

ら、茶を振舞ふやら、お客の話に聞きとれて、笑顔を見せたり、時にはお客の頬を撫でたりする。しかし、自分ではあまり口をきかない。哀れなことがあつたり、悲しいことがあつたりすれば、慰めてやつたり適當な助言をしてやつたりする。家庭の内情を打ち開け、心の祕密を打ち開けて、彼女の手をとつて泣いた人がどれだけあることだらう！ いつも彼女はお客と向き合ひに坐つて、そつと肘をつきながら、ひどく同情して相手の眼を見て、愛想よく微笑みを洩らすので、客は思はずも『タチャーナ・ポリソヴナ、あんたは何ていふ好いお方なんでせう！ どうかこの胸の中を聞いて下さい。』といふやうな氣持になつてくる。小さな小ぢんまりした部屋に入ると、誰でも居心地のよい温か味を感じる。若しかういふことがいへるなら、彼女の家はいつも上天氣なのである。タチャーナ・ポリソヴナは不思議な女である。が、誰も彼女を不思議がりはしない。彼女のたしかな分別や、しつかりしたところや自由なところ、他人の悲しみや喜びに對する温かな同情など、一口にいへば、あらゆる彼女の美れた性質といふものは、全く生まれながらにして具はつてゐるもので、彼女にとつては何も骨の折れることでも面倒なことでもない、……といふよりほかに別に考へやうもないのである。従つて、わざわざ有難がるものでもない。彼女は若い人たちの遊びや悪戯を眺めてゐるのが殊のほか好きである。胸に兩手をかさね、頭を後ろへそらし、眼を細くして、にこにこしながら坐つてゐるかと思ふと、急に溜息を

ついでいふのである。「ああ、子供よ、可愛い子供よ……」人は彼女のそばへ行つて、手をとつてかういひたくなる。「ねえ、タチャーナ・ポリソヴナ、あなたは御自分の價値を御存じないんですね、あなたはいくら素材で、學問がおありにならないからといつても、實に偉いお方なんですよ！」その名は何か親しい、なつかしい響きを傳へる。そして好んで口にされ、口にする人に人なつこい微笑みを浮かべさせる。例へば、道で出會つた百姓に訊ねたとする、「おい君、グラチェーフカへはどう行つたらいいだらう？」假に何度訊ねたとしても、「それは、旦那、先づヴァソヴォエへおいでになつて、そこからタチャーナ・ポリソヴナ様ところへおいでなさい。それから先は誰でも教へてくれませう。」と答へるに決まつてゐる。しかも百姓たちは、タチャーナ・ポリソヴナの名を口にするときには、何だか妙に頭を揺りうごかす。彼女は身分相應に僅かばかりの召使を置いてゐる。邸や、藏や、洗濯場や臺所は女中頭のアギーフィヤといふ、もとはタチャーナ・ポリソヴナの保母をしてゐた極めて氣だての善い、涙もろい、齒もなくなつてゐる女が采配を振つてゐた。その指圖をうけてゐるのはアントーノフ林檎のやうにふつくりした紅い頬の、頑丈な二人の小間使である。侍僕や、執事や、食堂番の役目は七十二になる下男のポリカルプが勤めてゐる。この老人は學問のある男で、もとはヴァイオリニストで、ヴァイオリニの崇拜家で、又あのナポレオン、いや彼の所謂ポナベルト奴を眼の仇にし、夜うぐひすが飯

よりも好きだといふ珍しい變り者である。彼はいつも自分の部屋に夜うぐひすを五羽や六羽、飼つておかないことはない。春の初めになると、籠に寄り添つて、最初の一聲を待ちながら幾日も幾日も坐りこんでゐる。やがてやうやくその聲を聞くと、彼は両手で顔を覆ひ、

「おお、可哀さうに、可哀さうに！」と呻き出して、さめざめと泣きはじめる。

ポリカルプには手傳ひとして、自分の孫で、ワーシヤといふ十二ばかりになる、髪が縮れた、眼の鋭い男の兒が附いてゐる。ポリカルプはこの子を無性に可愛がつて、朝から晩まで世話をやいてゐる。彼はまたその教育も自分でしてやる。

「ワーシヤ！ ポナベルト奴は悪黨だつて言ひな。」と彼はいふ。

「さうしたら何を呉れる？ お祖父ちゃん。」

「何を呉れるつて？……なんにもやらないよ。……一體お前は何だと思ふ？ ロシア人ぢやないかえ？」

「私はアムチャニンだよ、お祖父ちゃん。アムチェンスクで生まれたもの。」

\* ヴイオッティ イタリヤのヴァイオリニスト（一七五三—一八二四）。

\*\* アムチェンスク 「民衆の間では、ムツェンスクはアムチェンスクと呼ばれてゐる。そこの若者は敏捷である。」（作者註）

「ああ、この馬鹿野郎！ アムチェンスクはどこにある？」

「私、そんなこと知るもんかい？」

「ロシアにあるんだぞ、アムチェンスクは。この馬鹿。」

「ロシアにあるつたつて、それでどうしたの？」

「それでどうだつて？ お亡くなりになつたミハイロ・イラリオノキッチ・ゴレニシチェフ・クトウゾフ・スモレンスキイ大公殿下がな、神様のお助けを籍りて、このロシアの地からボナバルト奴を追つ拂つて下すつたんだぞ。此時だ、あの『踊るところか、ボナバルト、靴下留をおつことし』つていふ唄が出来たのは。わかつたかえ、大公殿下がお前たちの生まれた國を助けて下すつたんだよ。」

「それで私がどうしたつていふの？」

「ああ、この頓馬野郎、この頓馬！ なあ、もしもミハイロ・イラリオノキッチ大公殿下がボナバルト奴を追つ拂つてくれなかつたら、お前なんか今頃はどこの馬の骨かわからないフランス人に脳天をステッキでたたかれてるんだぞ。その役人がな、こんな風にお前ん所へやつて来て『機嫌はどうだ？』つていふだらう、それからこつん、こつんだ。」

「もしたら私、どんと一つ横つ腹を小突いてやらあ。」

「ところがな、『今日は、今日は、こつちへお出』なんかつていつて、頭の毛をつかむぞ。」

「もしたら私、そいつの脚を、ひよろひよろ脚を打つ叩いてやる。」

「うん、さうさう、奴等の脚はひよろひよろ脚だなあ、……さあ、それで、お前の手を縛つたらどうする？」

「そんな真似させないや、私、別當のミヘイに加勢して貰ふ。」

「だが、どうだ、ワーシヤ、フランス坊とミヘイぢや勝負にならんぢやないか？」

「ならないつて！ ミヘイはほんとに強いんだよ。」

「さあ、敵はなかつたらお前どうする？」

「俺ら、うしろから叩いてやる、うしろから。」

「もしたら『御免つていふだらうな、』御免、御免、どうぞ！』つて。」

「そんなこといつたつて、『どうぞも糞もあるもんか、この碌でなしのフランス坊！』つていつてやらあ……」

「えらいぞ、ワーシヤ！ さ、そんなら『ボナバルト奴は悪黨だ！』つて唝鳴るんだ。」

「唝鳴るから砂糖おくれよ！」

「何だ、こいつ奴！……」

タチャーナ・ポリソヴァナは女地主連には殆んど會はない。女地主たちの方でも自ら進んで訪ねようとしなない。タチャーナは彼女たちを面白がらせることが出来ない。女たちがやかましくお喋りをしてゐるのを聞いてゐると、つい睡たくなる。はつと氣がついて、眼をあげようと努めるけれど、また睡氣がさす。タチャーナ・ポリソヴァナは大體、女といふものを好かないのである。彼女の友達に、感心な、おとなしい青年がゐるが、その男に一人の姉があつた。三十八九にもなる老嬢で、至つて氣だての善い人であるが、今は器量も落ちて、向ふ見ずで、ともすれば有頂天になる女であつた。弟が折々、近所のタチャーナの話聞かせてゐた。ある天氣のよい朝、この老嬢はだしぬけに馬に鞍を置かせて、タチャーナ・ポリソヴァナのところへ出かけて行つた。裾の長い着物を着、帽子をかぶつて、草色の面帕をつけ、髪を振りみだして、玄關へ入つて行つた。水妖かと思つて怖ぢ氣づいてゐるワシヤを尻目にかけて、彼女はどどん客間の方へ駆け込んだ。タチャーナ・ポリソヴァナは驚いて立ち上らうとしたが、足がすくんでしまつた。「タチャーナ・ポリソヴァナ」と、この來客は哀願するやうな聲で話し出した、「無躰をお許し下さいまし、私はあなた様のお友達のアレクセイ・ニコライキッチ・K……の姉でございます。お噂はいろいろ弟から承はつて居りますので、是非ともお近づきになつていただきたいと存じます。」

「それはまあ、ようこそ。」と呆氣にとられて主は口ごもつた。  
「お客は帽子を脱ぎすて、捲き髪をふさふささせながら、タチャーナ・ポリソヴァナのわきに坐り、その手を取つた……」

「ああ、この方だつたわ」と彼女は物思はしけな、感きはまつたやうな聲で言ひ出した、「これこそ、あの氣立ての善い、さつぱりした、高尚な、心の清らかなお方なんだわ！ ああ、さうだわ、これがあの、あつさりしてゐて、深味のあるお方なんだわ！ うれしいわ、私、うれしいわ！ わたしたち、どんなに、お互ひに好きになるでせう！ わたし、これで、ほつとしましたわ……この方、こんなお方だつて、わたし想像してた通りだわ、」彼女はタチャーナ・ポリソヴァナの眼をじつと見まもつたまま、囁くやうに附け足した、「あなた、ほんとに怒つてらつしやるんぢやありませんの、ねえ、あなた、ねえ？」

「どう致しまして、ほんとに喜んでゐますわ……あの、お茶でも召しあがりませんか？」  
お客は慎ましく微笑んだ。

Wie wahr, wie unreflectiert (なんていふ打ちとけた、なんていふわだかまりのない方でせう)と、彼女は獨り言のやうに呟いた、「あなた、あなたを抱擁さして下さいな！」

老嬢はタチャーナ・ポリソヴァナのところに、のべつまくなしに喋りつづけて、三時間も腰を



据ゑてゐた。彼女はこの新しい知合ひに、しきりに自分自身の豪いことを説明しようとする。このだしぬけなお客の歸るのを待ちかねて、困りはてた主婦は風呂に入つて、菩提樹の煎茶をたくさん喫んで、床へ入つた。しかし翌る日にまた老嬢はやつて来て、四時間も過ぎ、これからは毎日タチヤーナ・ポリソヴナに逢ひに来ると約束して行つた。察するに彼女は當人の言葉を籍りていふと、自分はこの女の豊かな天分をあくまでも發達させ、完全に教育してやらうと思つたのであつた。そして若しも第一に、二週ばかりするうちにこの自分の弟の友達のことには『全く』幻滅を感じなかつたら、また第二に、遊びに来た若い學生に惚れこんで、直きに、まめやかな、はげしい手紙のやりとりなどをはじめなかつたら、それに手紙の中でお定まりのやうに、相手を神聖な、美しいものに祭りあげ、『一身を擧げて』犠牲にするといつたり、ただ願はくは姉と呼んで貰ひたいといつたり、更に自然の描寫に耽つたり、ゲーテやシルレル、ベッティナのことや獨逸の哲學のことを述べたりして、遂に可哀さうにも、この若者を暗澹たる絶望のちへ追ひこむやうな事にならなかつたら、必らずやタチヤーナはさんさんに弱らされたことであらう。それにしても若い學生は若さによつて眼をさませられた。彼は或る晴れた朝、『自分の姉にして、しかも最も親しい友達』に對する狂暴な憎惡に燃えて眼がさめた。そのために忿怒のあまり、すんでのこととて侍僕を殴るところであつた。それからといふもの長い間、崇高な純潔

な愛などといふことは一言聞いただけでも癪に障つてたまらないやうになつた……。さて、こんなことがあつてから、タチヤーナ・ポリソヴナは前よりも一そう近所の女たちと附合ふのを避けるやうになつた。

悲しいかな！ この世には無常ならぬものはないのである。私が今までお話した氣立てのよい女地主の生活のことは、何もかもが過去のことである。彼女の家にあふれてゐた静寂は永久に破られてしまつたのだ。今、彼女のところには、すでに一年餘りになるが、ペテルブルグから來た畫家の甥が住んでゐる。それは、かういふ事情からであつた。

八年ほど前、タチヤーナ・ポリソヴナの許に十二ばかりになる男の子で、彼女の亡くなつた兄の息子にあたるアンドリュシーシャといふ孤し兒が引きとられてゐた。アンドリュシーシャは大きくばつちりして鬚ほひのある眼と、小さい可愛らしい口と、よく整つた鼻と、美しく秀でた額をしてゐた。靜かな、きれいな聲で話をし、いつも身なりをきちんとし、行儀正しく、お客に甘えたり、媚びたりし、いかにも孤し兒らしく、いちらしく叔母さんの手に接吻したりした。若し誰かが訪ねて行かうものなら、いち早く安樂椅子を持つてくる。彼は悪戯ひとつするではなし、物音ひとつ立てるではなし、本を持つて部屋の隅へ行つては、おとなしく慎ましやかに坐つて、椅子に凭れかかることさへもしなかつた。お客が入つて來ると、わがアンドリュシーシャは立ちあがつ

て、控へ目に微笑みを作つて顔を赧らめる。お客が出て行くと、また腰をおろして、ポケットから刷毛と懐鏡を取り出して、髪を撫でる。彼は極く小さい時分から繪どころがあつた。紙きれを見つけると、直ぐに女中頭のアガーフィに頼んで鉄を借り、よく氣をつけて、その紙を四角に切り、紙のまはりに縁をとつて仕事にとりかかる。腫の大きな眼を描いたり、ギリシヤ風の鼻を描いたり、煙突のある家を描いて、螺旋形の煙を吹いてゐるところを描いたり、腰掛かと思はれるやうな前向きの犬だとか、二ひきの鳩のとまつてゐる小さな樹などを描いて、それに『何年何月何日マールイエ・ブルイキ村にて、アンドレイ・ベロヴゾーロフ畫く』と署名した。タチャーナ・ポリソヴナの命名日のまへ二週間ばかりといふものは特に精を出して仕事をした。先づ第一に出て来てお祝ひの言葉を述べるのはこの子で、薔薇色のリボンで括つた巻物を叔母さんに差し上げる。タチャーナ・ポリソヴナは甥の額に接吻して、結び目をほどく。巻物は披けられて、圓柱があり、中央に祭壇があつて、大膽に陰影をつけて描き上げた神殿が、物珍しさうに見てゐる叔母さんの眼の前へあらはれる。祭壇には心臓が燃え、花束が置いてあつて、その上の方には、曲りくねつた飾り枠の上に、はつきりした文字で『敬愛に充ちたる甥より叔母さんにして恩人なるタチャーナ・ポリソヴナへ、深甚なる愛慕の標章として』と書いてある。これを見るとタチャーナ・ポリソヴナは再び接吻をして、一ルーブリの銀貨を與へる。しかし彼女は心から甥を

愛する氣にはなれなかつた。アンドリューシャのさもしい心根が全く氣にいらなかつたのである。さうかうしてゐるうちに、アンドリューシャはすんすん大きくなつて行つた。タチャーナ・ポリソヴナには、その行く先が案じられるやうになつて来た。が、このとき、思ひもよらない事が起きて一先づ苦勞を免れることになつた……。

といふのはかういふことである。今から八年ほど前の或る日のこと、六等文官の帶勤者ピョートル・ミハイリチ・ベネヴォレンスキイ氏なる人が訪ねて来た。ベネヴォレンスキイ氏は、嘗つては程遠からぬ郡役所のある町に官吏をしてゐたが、その頃は足繁くタチャーナ・ポリソヴナのところへ遊びに来たものであつた。その後ペテルブルグへ移つて、本省に入り、かなり重要な地位を得た。ところで屢々公用で旅行をするが、このたびは昔の知合ひを思ひ出して、『村の静寂に抱かれて、』二日ばかり公務の疲れを休めようと考へ、彼女のところへ立寄つたのである。タチャーナ・ポリソヴナはいつものやうに慇懃に彼を迎へた。そしてまたベネヴォレンスキイ氏も……。しかし、この話を進める前に、親愛なる讀者よ、この新しい人物を紹介さしていただきたい。

ベネヴォレンスキイ氏は中柄な、見たところおとなしさうな、小肥りな人で、脚は短かく、手はやんはりふくれてゐた。ゆとりのある、かなりきちんとした燕尾服に、高い、幅の広いネクタ

イをつけ、雪のやうに眞白いワイシャツを着て、絹のチョッキに金鎖をからませ、人差指には寶石入りの指環をはめ、金髪の鬘をかぶつてゐる。話をするときには諄々と人を説くやうな、物やはらかな調子で、歩くときにも音を立てない。見てゐても氣持のよい微笑みをうかべ、眼を快よく動かし、襟飾りの中に顎を埋めるのも見てゐて氣持がよい。概して彼は氣持のよい男であつた。生まれつき實に氣だての善い男で、容易に涙を流したり、物に感動したり、その上に、藝術のことになるとなると後先の考へもなく火のやうに熱中するのであつた。後先の考へもないといふのは實際のことであつた。なぜといふのにベネヴォレンスキ氏には、正直にいへば、藝術のことなどは全く何一つ譯がわからなかつたからである。ところが、どうしてこんな熱情が湧いて來たのか、如何なる神祕的な、不可解な法則の力によるものかは驚異ですらもあつた。どうも、見たところは獨りよがりな、むしろ世間並な人間だつたのである……。尤も、わがロシアには、こんな人間は實に夥しい。

藝術および藝術家に對するかういふ手合の愛情といふものはお話にならないあくどさを帯びてゐる。こんな連中と附合つたり、話をしたりするのは閉口である。彼等は全く蜂蜜を塗つた丸太棒のやうなものである。例へば、ラファエルをそのままラファエル、コレッジオをそのままコレッジオなどは決して彼等はいはない。『神のごときサンツイオ、匹儔なきデ・アレグリス』とい

ひ、必らず〇に力を入れていふ。大抵のお國ものの、己惚れの強い、極めて蟲のいい凡才を彼等は天才として、即ち一そう正しくいへば天才として祭りあげるのである。『イタリアの碧なす空』『南國の檸檬樹』『プレント河畔のかぐはしき風』などといふ言葉はいつも彼等の唇にのほる。『ああ、ワーニャよ、ワーニャ。』とか『サーシャよ、サーシャ。』と互ひに情を含めていふ。『行かむかな、南の國へ、南の國へ、……君も我も魂に於いてはギリシヤびと、古代のギリシヤびとならずや！』展覽會のロシアの畫家の作品の前などへ行くと、かういふ人たちを見ることが出来る。(これらの紳士の大部分が熱烈なる愛國者であることを注意しなければならぬ。) 彼等は或ひは二歩ほど後ろにさがつて、頭を仰向けにし、或ひはまた畫に近づいて行く。彼等の眼は油のやうな霧ほひを一ぱいにたたへてゐる……。『ふう、見あげたものぢやのう！』と遂には感きはまつていふのである。『魂が、じつに魂が！ ああ、生きてる！ 生きてる！ ああ、魂がこもつてゐる！ 磅礴たる魂が！……よくもこんな想を構へたものだ！ この構想たるや眞に大家の風ありだ！』ところで、彼等の自分の家の客間にある繪はどんなものか！ 毎晩のやうに彼等のところへやつて來て、お茶を飲んで彼等の話に耳を傾けてゐる畫描きどもはどうであるか！ 彼等自身の部屋が即ち遠近法を見せてゐるのを見よ、前景には右の方に刷毛があり、磨き立てた

\* ワーニャ、サーシャ　ワーニャはイワンの、サーシャはアレクサンドルの愛稱。

床にはうつすらと塵がたまり、窓に近い卓子のうへには黄色いサモワールがあり、この家の主人は寝巻を着て頭布をかぶり、頬に明るい日光をうけてゐる！ 熱病やみのやうな賤しい微笑をかべて、彼等を訪れる髪の長い美神の弟子たちは如何なるものであらう！ 彼等のところでピアノに向つて、きやっきやつとさざめく蒼ざめた緑いろの顔をした御婦人がたは如何に！ これが抑ゑわがロシアにおけるお定まりなのだ。ロシア人は美術にばかり専心してはゐるのだ、——何にでもかんにでも手を出すのである。だからこそ、これらのアマチュアの紳士諸君がロシアの文學、わけても劇文學に非常な援助をしてゐることは毫も怪しむに足らないのである……『ジャコブ・カンナザール』は彼等のために書かれたものだ。何百遍とはなしに書き古された世に認められない天才と世の人々、全世界との葛藤は彼等を心から感動させるのである。

ベネヴォレンスキイ氏が來た翌る日に、タチャーナ・ポリソヅナは茶話をしながら甥に向つて、その繪をお客様にお眼にかけるやうにといひつけた。

「こちらの方は繪を描くんですか？」とベネヴォレンスキイ氏はいささか驚いていひ、物珍しさうにアンドリュエーシャの方を向いた。

「ほんとに描きますの。」とタチャーナ・ポリソヅナはいつた。

「ああ、さう、お見せなさい、見せて下さい。」とベネヴォレンスキイ氏は後を引き取つた。

アンドリュエーシャは赧くなつて微笑みをうかべながら、お客に畫帖を持つて來た。ベネヴォレンスキイ氏はその道の通らしい様子をして、畫帖をめくり始めた。

「うまいねえ、坊ちゃん」と彼は遂にいひ出した、「うまい、なかなか上手だ。」

それからアンドリュエーシャの頭を撫でた。アンドリュエーシャは素早くその手に接吻した。

「どうです、何ていふ腕前でせう！——おめでたう、タチャーナ・ポリソヅナ、おめでたう。」

「ピョートル・ミハイリチ、ここでは先生を捜してやることも出来ません。町から頼めばお金が大變ですし、お隣りのアルタモノフさんのお宅なんかには畫家さんがいらしつて、大へんお上手な方ださうですけど、奥様がほかの者に教へることを禁じていらつしやいましてね。手際が落ちるとおつしやいましてね。」

「ははあ、」とベネヴォレンスキイ氏はいつて、じつと考へ込み、上眼づかひにアンドリュエーシャを眺めた。「まあ、そのことについては、いづれ御相談いたしませう。」と急に附け加へて、手をこすつた。

その日、彼はタチャーナ・ポリソヅナに、ちよつと内々で話をさせてくれと頼んだ。二人は一室に閉ぢこもつた。半時間ほどして、二人はアンドリュエーシャを呼んだ。アンドリュエーシャが入

つて来た。ベネヴォレンスキイ氏はいささか顔を赧らめて、眼をかがやかしながら窓ぎはに立つてゐた。タチヤーナ・ポリソヴナは片隅に坐つて、涙を拭いてゐた。

「さあ、アンドリュウシヤ！」とやがて彼女は言ひ出した。「ピョートル・ミハイリチ様にお禮をおつしやい。このお方がお前のお世話をして、ペテルブルグへ連れて行つて下さるんですよ。」

アンドリュウシヤは全くその場で気が遠くなつてしまひさうだつた。

「さあ、正直にいつて御覽よ、」とベネヴォレンスキイ氏は威厳にみちた、しかも勞はるやうな優しい聲で言つた、「坊ちゃん、あんたは畫家になりたかありませんか、藝術に向いて行くのが聖いあなたの役目だとは思ひませんか？」

「ほくは畫家になりたいんです、ピョートル・ミハイリチ、」とアンドリュウシヤは聲をふるはして言ひ切つた。

「さういふことになれば私も嬉しい。そりや勿論、あんたも、」とベネヴォレンスキイ氏はつづけた、「あんたの大事な叔母さんに別れるのは辛いでせう。あんたは心から叔母さんを有難いと思はなければなりませんからね。」

「ほくは叔母さんを崇拜してます。」とアンドリュウシヤは遮つて、眼をしばたいた。

「さうだとも、さうだとも、それはもうよく分かつてる、それはそれは感心なことだ。だがしかし、考へて御覽、これからさき、どんなに嬉しいことか……あんたが成功して……」

「アンドリュウシヤ、私を抱いて、」と人のよい奥さんは口ごもつた。  
アンドリュウシヤは叔母さんの頸筋にすがりついた。

「さあ、今度はお前の恩人にお禮をおつしやい。」  
アンドリュウシヤはベネヴォレンスキイ氏の腹に抱きついた、そして爪立ちをして伸びあがり、彼の手をとつて接吻した。恩人は實際になすがままにさせたが、それほど氣乗りをして、おいそれと許した譯でもなかつた……。彼は子供を落ちつかせ、満足させなければならなかつた。だからこそ、我慢も出来たのである。二日の後、ベネヴォレンスキイ氏は新しい弟子をつれてこの家を立ち去つた。

別れてから最初の三年の間はアンドリュウシヤは實に屢と手紙をよこし、時には手紙に畫を添へて来た。ベネヴォレンスキイ氏も、時にはまた大抵は稱讚の言葉を簡単に添へてよこした。ところがその後、手紙が漸く稀れになつて、遂には全く跡を絶つた。丸一年といふもの、甥から一言の消息もなかつた。タチヤーナ・ポリソヴナは早くも氣がかりになつて来た。ところへ不意に次のやうな文面のたよりが届いた。

なつかしい叔母さま！

一昨々日、私の保護者ビョートル・ミハイリチさんは亡くなりました。烈しい脳溢血の發作が私の杖とも柱とも頼む人を奪つてしまつたのです。もとより今は私も二十歳となりました。私は七年の間に著しい進歩を致しました。私は充分の技倆に自信をもち、それによつて暮らしても行けるのであります。私は失望は致しません。しかし兎に角、若し御都合がつかましたら早速二百五十ルーブリを手形でお送り下さいまし、あなたのお手に接吻し、いつまでも、いつまでも……

匆々

タチャーナ・ポリソヴナは甥に二百五十ルーブリを送つてやつた。二箇月経つて彼はまた無心をいつてよこした。彼女はあんなだけの金をかき集めて、また送つてやつた。ところが二度目の送金をうけて六週間とも経たぬうちに、彼は公爵夫人チュルチェレーシネワから註文された肖像畫を描くのに要る繪具代だといつて、三度目の無心をした。タチャーナ・ポリソヴナは拒絶つた。「かういふ状態では、」と、彼は叔母に書き送つた、「私は田舎へ歸つて静養したいと存じます。」さうして實際に、その年の五月にアンドリュエーシャはマイルイエ・ブレイキにかへつて來

た。

タチャーナ・ポリソヴナは初めは誰だかわからなかつた。甥の手紙から推して、病弱の瘦せた人を見ることと思つてゐたのに、自分の前にあらはれたのは、血色のよい大きな顔に、油じみた捲髪の、肩幅の廣い、肥つた若者であつた。華奢な、蒼白いアンドリュエーシャは今ががつしりしたアンドレイ・イワノキッチ・ペロヴゾーフになつてゐたのだ。變つたのは外觀ばかりではなかつた。昔のこせこせした内氣なところや、細心なところ、潔癖なところは影にも見えず、粗雑な、そそつかしい、見るからに厭なだらしない風が眼につくのであつた。歩くにも右によるよろ左によるよろして、安樂椅子にとつかと身を投げるやら、卓子の上に寝轉んだり、伸々と横になるやら、大きな口を開けて欠伸をするやら叔母さんにも下男どもにも傍若無人の振舞ひをして見せた。「俺は畫家だぞ、全く自由なんだ！ こちとらの方を見ろ！」といふ。時には幾日も筆をとらなかつた。一たびいはゆるインスピレーションなるものが湧きおこつて來ると、まるで酔ばらつてでもゐるかのように呂律の廻らぬ舌で、騒がしく勿體ぶつたことを並べ立てる。頬はいやに赤くなり、眼はほんやりと霞んで、自分の技倆や、自分の成功や、自分が發展し進歩しつつあるといふことなどを得々と話し立てる……。そのくせ實際のところは一寸した肖像畫さへも満足に描くだけの力量のないことは分かり切つてゐるのである。彼は全くの明盲で、何一つ讀ん

だこともない。尤も畫家が本を読んで何のためになるのか？ 自然と自由と詩とが、畫家の要素なのだ。捲髪を振り立てて、鶯のやうに囀つて、せいせいジュニコフ煙草を吹かして居ればそれでよいのである！ 露西亞人が剛膽なのは甚だ結構である、但しこれは人によりけりで、天分のない下等のポレジャーエフに至つては、とても鼻もちがならない。わがアンドレイ・イワーヌイチは叔母さんのところに暮らしてゐた。居候をするのが趣味に合つてゐるのらしかつた。お客たちには蛇蝎のやうに嫌はれた。彼はよくピアノの前に坐りこんで（タチャーナ・ポリソヴナの家にはピアノも据ゑつけられてゐた）、『早き禰を』といふ曲を一本の指で弾き始める。調子を合はせ鍵盤を叩いて、何時間も立てつづけに、ワルラーモフの『ひとり寂しき松』とか、『いや、いや、醫者、來ちやいやよ、』とかいふ戀歌を苦しうに唸る。さうして、彼の眼もとは脂ぎつて、頬は太鼓のやうに光り出す……。さうかと思ふと、だしぬけに、『しづかなれかし、浪たちさわぐわが愛慾、』を喚き立てる……。タチャーナ・ポリソヴナは全く身ふるひするのである。

「どうも不思議ですわね、」と彼女はあるとき、私にいつた、「この頃はどうしてあんなに捨鉢な歌をつくるんでせう。私どもの若い時分とは、まるで違ひます。それは悲しい歌もあるにはありましたけど、聽いてて氣持のいい歌ばかりでした。……まあ、こんな風に、

さあさ、おじやれよ、草場のなかに、

あだにおぬしを待つものを、

さあさ、おじやれよ、草場のなかに、

つきぬ涙は 誰がゆゑに……

ああ、おぬしが草場のなかに

おじやるその時や夜も明ける

タチャーナ・ポリソヴナは人の悪い微笑みを見せた。

『わたしや、くるしい、なやましい、』隣の部屋で鋸が唸り出した。

『いい加減におし、アドリューシャ。』

『君にわかれて、わがところ、なげき悲しむ、』倦くことを知らぬ歌ひ手はなほもつづけてゐる

\* ポレジャーエフ 年若くして世を去つたロシア詩人。學生時代にすぐれた詩を書いたが、年少の身をもつて致へて専制政治の邪惡を諷し、自由への憧憬を書いたためにニコライ一世の忌諱にふれ、つひに悲劇的な生涯を送らなければならなかつた。彼の詩は屢々レルモンツフの詩に比較された。（一八〇六—三八）

た。

タチヤーナ・ポリーソヴナは仕方のない子だといふやうに頭を振つた。

「ああ、もうこんな畫家には私も！」

その時から一年は過ぎた。ペロヴゾーロフは依然として叔母さんのところに暮らし、今もなほペテルブルグへ行かうとしてゐる。田舎へ來てから、彼は一そう横肥りになつた。叔母さんは——こんなことは誰が思ひがけたらう、——したい放題に甘やかし、また近所の若い娘たちは彼に想ひを懸けてゐる……。

多くの昔の知合ひはタチヤーナ・ポリーソヴナのところへは行かなくなつた。

あ  
と  
が  
き



### 流浪の民

『流浪の民』は、一八二三年プッシュキンがオデッサにあるとき書き出されて、翌年ミハイロフスコエ村で完成されたものであつた。プッシュキンはこの作品の中で、文化人と原始人との對立を描いたのであつた。彼もまた、多くのロマンティシズムの詩人のやうに自然に近い原始人の生活や感情を描いたのであつたが、決して理想化はしなかつた。一八二三年は『オネエギン』の第一篇にも取りかかつてもあるが、何れもバイロニズムの影響にのみもとづいてゐたのではなかつた。たとへば原始人の生活にあこがれる文化人を描いても、バイロンの多くの詩に横たはつてゐるやうな、エゴイズムを決して良しとはしてゐないのである。すなはちここではバイロンのエゴイズムの弱點が完膚なきまでに、解剖されてゐるのである。

プッシュキンも今まではバイロンの影響下にあつたが、表面の類似がどうあらうともすでに本質的なバイロニズムから遠ざかつてゐることをここに見なければならぬ。

#### ビョートル大帝の黒奴

プッシュキンがこの作品を書いたのは、一八二七年であつた。親友ヴーリフはその日記のなかで、次のやうに記してゐる。

「昨日はプッシュキンのところで食事をした。書いたばかりの散文小説の最初の二章を見せられ

たが、それにはアビシニヤの小王の子で、トルコ人に誘拐され、コンスタンチノーブルに来て、ロシア公使からピョートル大帝に獻ぜられ、大帝に育てられて、いたく寵愛されてゐた彼の祖父ハンニバルが主要人物となつてゐる。この小説のやまは、プッシキンの話によると、黒奴の妻が白人の子を産み、そのために修道院へ送られるといふことになる由。」

ヴーリフが記したのは九月の十六日で、その時はまだ完成してゐなかつたのである。それどころか、この散文作はつひに完成されずにしまつて、題さへもつけられなかつた。題がつけられたのは、彼の死後、雑誌『現代人』に掲載される際、編輯者によつてであつた。完成されなかつた、しかし、この未完の小説は、彼自身の創作の道においても、ロシア小説の歴史においても、明らかに一つの紀元をなすものであつた。

先づ私たちは、この小説が、他の散文形式による彼の作品と同様、歴史的な性質をもつことを認めなければならぬ。

プッシキンが歴史に多大の關心を寄せてゐたのは少年時代からであつて、學習院を卒業した頃には、その時分に世に出たばかりのカラムジンの『ロシア國史』を愛讀してやまなかつた。更にキシニョフにあつては、閑暇のある生活のうちに、夥しい歴史書類を耽讀した。ミハイロフスコエの幽居の間に記された書類のうちには、中世史やローマの史家タキトゥスについての覺書など

が散見されるのであるが、それにもまして彼の興味をひいてゐたものは、やはりロシアの歴史であつた。それと共に、十八世紀のロシア生活に材をとつて、歴史小説を書かうとする意慾がたえず彼の脳裡を離れなかつた。かくして、最初の散文作として、この作品に手を着いたのであつた。

この小説の主人公は彼自身の曾祖父にあたるイブラヒム・ハンニバルであつた。そこに人として、皇帝としてのピョートルを配し、同時にピョートル時代の貴族の生活や感情、ピョートルによつて建設されて行く新しい社會の姿、乃至は當時の夜會を描いて、新時代と舊時代の代表者のタイプを示さうとした。

プッシキンはこの小説を書くにあつて、必ずしも事實にのみ據つた譯ではなかつた。彼自身の書いた『プッシキン家およびハンニバル家系譜』なる一文のうちには、アビシニヤ（エチオピア）の小王の子としてうまれた曾祖父のことが述べられ、「私の曾祖父ハンニバルは、家庭生活においては父方の曾父プッシキンと同様不仕合せな人であつた。最初の妻はギリシヤうまれた美人であつたが、白い娘を産んだ。ために彼は離婚して、妻を修道院に入るの餘儀なきに至らしめた」と記されてゐる。即ち、親友ヴーリフに語つた小説のやまであつた。しかし、この女性のことはかなり詳しく分つてゐるにも拘らず、「白い娘を産み」については今なほ何らの確證があげられてゐない。

ところで、この作品では、「白い娘を産み」云々とは反對に、イブラヒムが白人と姦通して、黒い子を産ませたことになつてゐる。更に、イブラヒムの事實上の結婚は、ピョートルの崩御して後のことであり、また彼の妻は貴族の娘ではなく、彼が『系譜』の中で記してゐるやうに、ギリシャうまれの娘であつた。この結婚は一七三一年のことで、翌年には早くも離縁し、間もなくロシア人と結婚したのであるが、この第二の結婚は宗教上の掟によつて永く認められず、正式に承認されたのは同棲してのち十五年を経てからであつた。

かやうに、事實に即しない部分があるにしても、これは作者の藝術的虚構といふべきものであつて、何らの問題を提示するものではない。

この作品は、散文の制約に従ひながら、あくまでレアリスティックな描寫に終始しえた最初のロシア小説の一つであつて、散文作家ブツシキンの道はここに決定されたといつても過言ではないのである。

#### 外 套

『外套』は『ネフスキ通り』とともにゴゴリの藝術にあつては第二期ともいふべき時代に書かれたものであつた。今や嘗ての若々しい、愉しい笑ひは、現實の醜惡な反面を見るユーモリストの悲しい笑ひに代り、嘗ての「うるはしいリリズム」にもまして「涙をとほしての笑ひ」

が著しく眼に觸れるやうになつたのである。

『外套』の書かれたのは一八四〇年であるが、計畫されたのはすでに數年前のことであつた。友人アンネンコフの思ひ出には、嘗てゴゴリは、或る貧しい役人が苦心慘愴して小銃を求め、フィンランド灣へ獵に出かけたところ、途中でふと氣がついて見ると、袖へ置いた筈の小銃が水に落ちたものか、八方さがして見たがどうしても見あたらず、つひにその役人は失望の餘り、歸宅するや否や病氣になつた。やがて、これに同情した同僚たちの寄附金によつて新しいものを求め得たけれども、その後は小銃の話が出ると、顔面蒼白になるのが常であつた……といふ逸話を熱心に傾聴した（笑はないのはゴゴリばかりであつた）由が語られてゐる。恐らくこれが『外套』を産む動機となつたものであらう。

主人公アカキイ・アカキエッチは喜劇的な存在であつた。しかも、ゴゴリは徒らに笑つてはゐない。それどころか、却つて機械的な人間への同情を靜かに物語つてゐるのである。執務の邪魔をしようとした若き役人が、思はずも手を引いたといふ場面は決して故なきことではない。更に世に時めく者の非人間的要素を摘發する作者は、かやうな要素を生む原因にまでも遡つてやまなかつた。

この作品のうちには一人の貧しい役人のささやかな幸福をめぐつて、ペテルブルグの役人生活

がまざまざと展開されてゐるが、かやうな貧しい、ロシア的な小市民の心理を理解し、表現しようとした作者の意圖は既にロシア文學においては未曾有のことであり、この一篇は後に來る作家たちに形式の上でも内容の上でも、多くの影響を與へたものであつた。「われわれはみなゴォゴリの『外套』から出て來た」とドストイェフスキイはいつて居る。「貧しき人々」と『外套』の對比は既にいくたびか繰り返され論議されて來たところである。嘗ては現實の注意ぶかい觀察者であつた作者は、今は單なる觀察者ではなく、アカーキイ・アカーキエッチのうちに自分自身を物語つてゐる。言ひ換へれば、この主人公の心理の中心は即ち作者自身の心理であつて、かやうな心理經驗を、彼は二九年の末から三一年三月に至る役人生活において具さに身をもつて經驗して來たのである。なほ『外套』のうちに、後にロシア文學の一つの要素となつたヒューマニズム的傾向の濫觴を見る評家の言にも私たちは聽かなければならぬ。

『外套』及び『ネフスキイ通り』の二篇はゴォゴリ自身のベテルブルグ生活の經驗と觀察とに基づいて作られたものであつて、しかも短篇小説における彼の才能を殆んど餘すところなく示した傑作であると私は信じてゐる。

#### ツルゲエネフの短篇

ここに收めた三篇は『獵人日記』よりとられたものである。ツルゲエネフの最初の詩集『パ

ーシヤ』(一八四三)が出た時、この若き詩人を、「嬉しいと思ふよりも、當惑を感じるほど好意をもつて批評し、熱心に稱揚した」のは、當時の最も偉大な批評家ベリンスキイであつた。そのベリンスキイさへも『パラーシヤ』以後の作品に對しては極めて冷淡で、詩人が如何なる精力を傾けようとも、到底この批評家の推獎をうけることはできなかつた。つひに詩人は自己の創作に何等の満足を見出すことができず、全く文學者として立つことを斷念して、ロシアを遠く離れ去らうとした。

去るにあつて、雑誌『現代人』の雜錄欄を埋める原稿を持ち合はさなかつた編輯者パナーエフから切に乞はるるままに、彼の手に残して行つたものは、九篇の詩、小論文および『ホーリとカリヌイチ』といふ題のついた短篇であつた。名を祕して、ドストイェフスキイの『九つの手紙より成る小説』と共に、文藝欄ならぬ雜錄欄に、編輯者によつて『獵人日記より』といふ、わざわざ讀者に卑下した題までつけられて發表された短篇、『獵人日記』の最初をなす小さな一篇が、作者の文學者としての位置を決定し、社會史の上までも大きい役割を演じようとは、作者すらも思ひがけぬところであつた、まことに「このスケッチに成功して、私はもつと書かうといふ氣になつた。さうして文學に歸つたのだ。」と後年の作者が告白して居るやうに、『ホーリとカリヌイチ』は作者の文學上の位置、乃至は藝術的進路を決定する礎石となつたものである。

13514

この作品が發表されたのは一八四七年であつた。その後五年に亘つて書かれた二十幾篇をもつて遂に一卷をなした『獵人日記』が、その中には殆んど戰鬪的な調子や矯激な反抗的な調子もなくして大きい社會問題であつた農奴制度に決定的な打撃を與へたことは、餘りにも周知の事實である。

中山省三郎

昭和二十三年六月十日印刷  
昭和二十三年六月十五日發行

譯者略歴

4. 3. 2. 1.  
一九〇四・二八茨城縣生。  
一九四七・五・三〇歿。  
早稻田大學露文科卒。  
主著 詩集『豹紋』  
評論『ドストイエフスキイ』  
譯書『獵人日記』(シルゲエネフ)  
『散文詩』(ツルゲエネフ)  
『永遠の伴侶』(メレジコフスキイ)  
『オネーギン』(プウシキン)

世界文學叢書 一 26  
ロシア短篇珠玉集



定 價 金 百 圓

譯 者 中山省三郎

發 行 者 榮野方彦

印 刷 者 京都市下京區西洞院七條南入 富森茂 彭

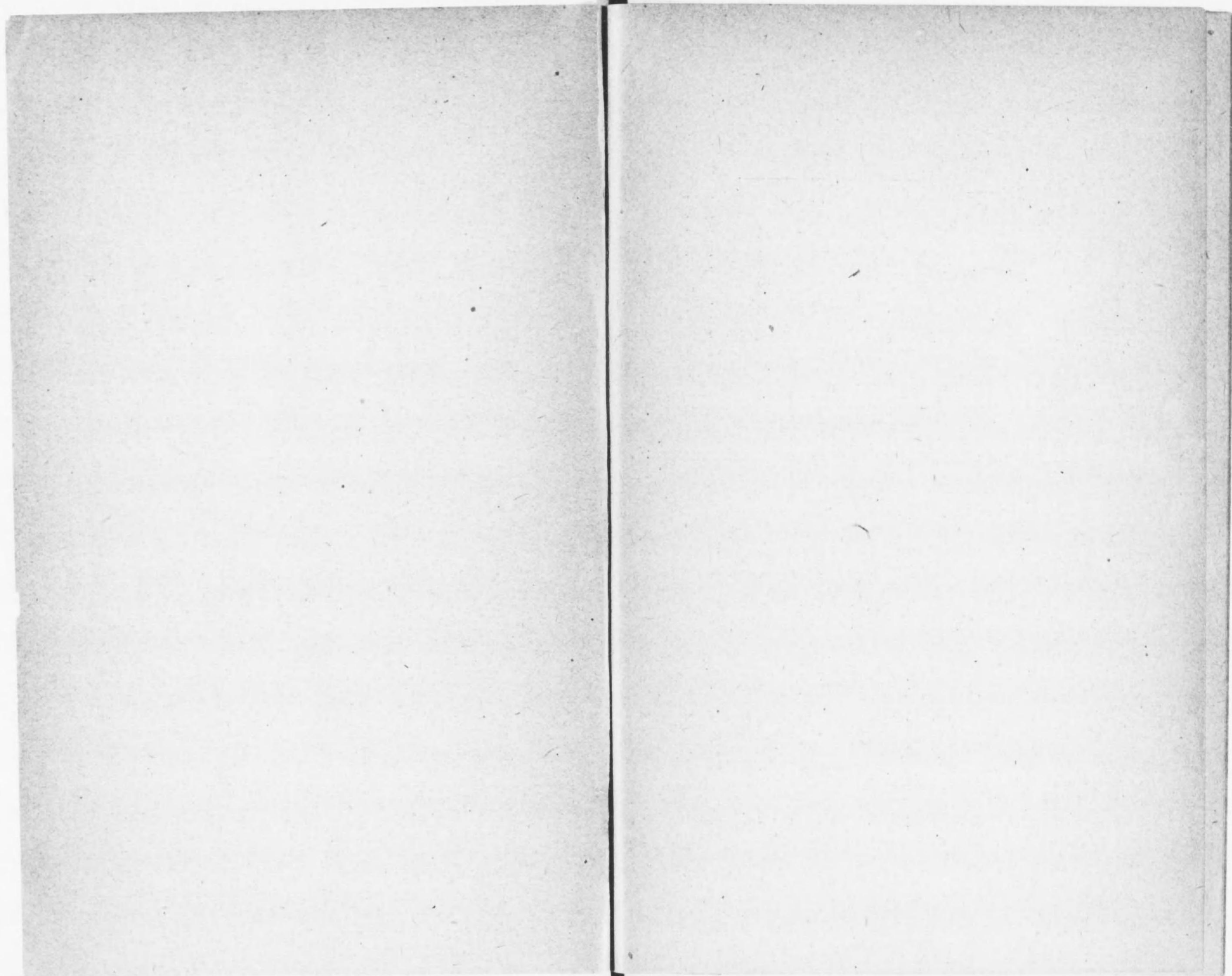
印 刷 所 京都市下京區西洞院七條南入 内外印刷株式會社

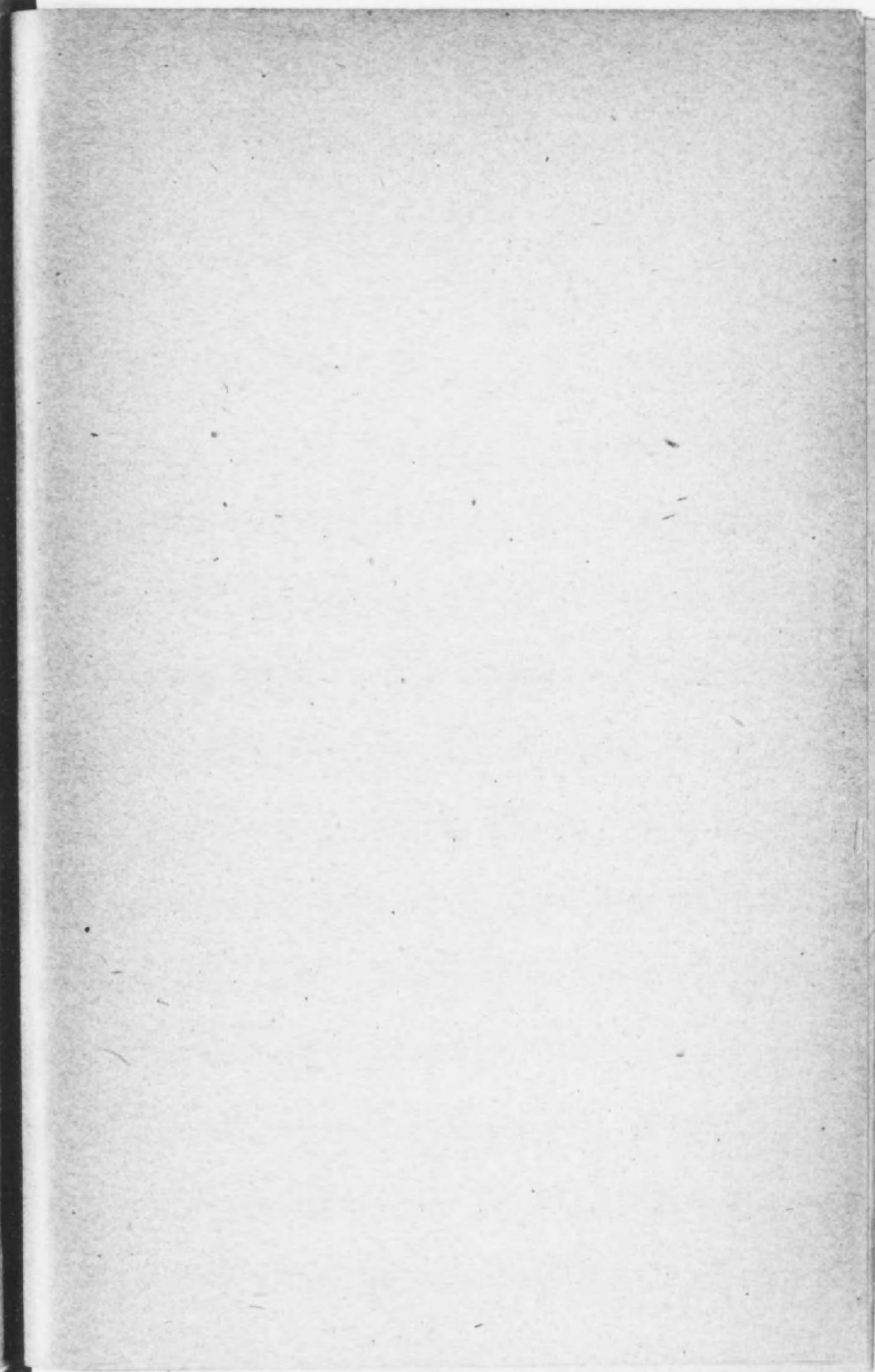
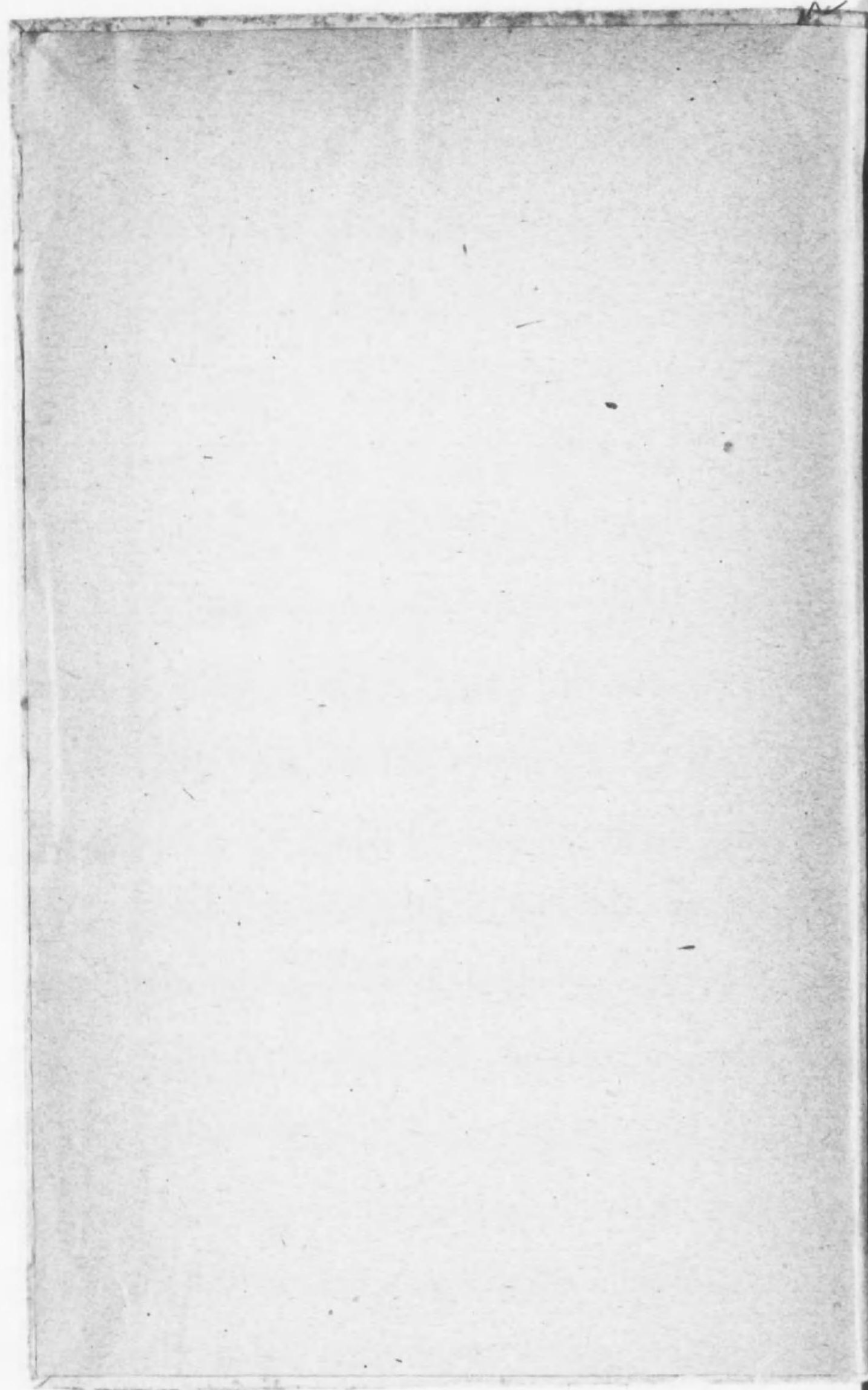
發 行 所 世界文學社

日本出版協會會員番號A二一九〇六七  
京都市下京區鉄屋町通四條下ル  
電話下局六〇〇八・六〇〇九番  
振替 京 都 二 五 六 二 二 番

配 給 元 東京都千代田區 日本出版配給株式會社  
神田淡路町二ノ九

落丁・亂丁は何時でもお取替へします





終

ここに収めた三人の作家の珠玉のような作品を読めば、いかにしてロシア文學精神が自らを確立し、いかにしてロシア文學が世界文學となつたかが分る。「流浪の民」(Цыгане)はプウシキンの一大抒情詩であり、「ピョートル大帝の黒奴」(Арап Петра Великого)は彼の最初の野心的な散文小説である。ドストイェフスキイに「我々は皆ゴキゴリの『外套』からでた。」と言わしめた『外套』(Шинель)はゴキゴリの第二期の傑作であるのみならず、その後のロシア文學を決定した一頂點である。ツルゲエネフの三篇は「獵人日記」(Записки Охотника)からとられたもので藝術的、社會的に大きな影響をもつたものである。ツルゲエネフのものは周知のことである。



¥ 100.00